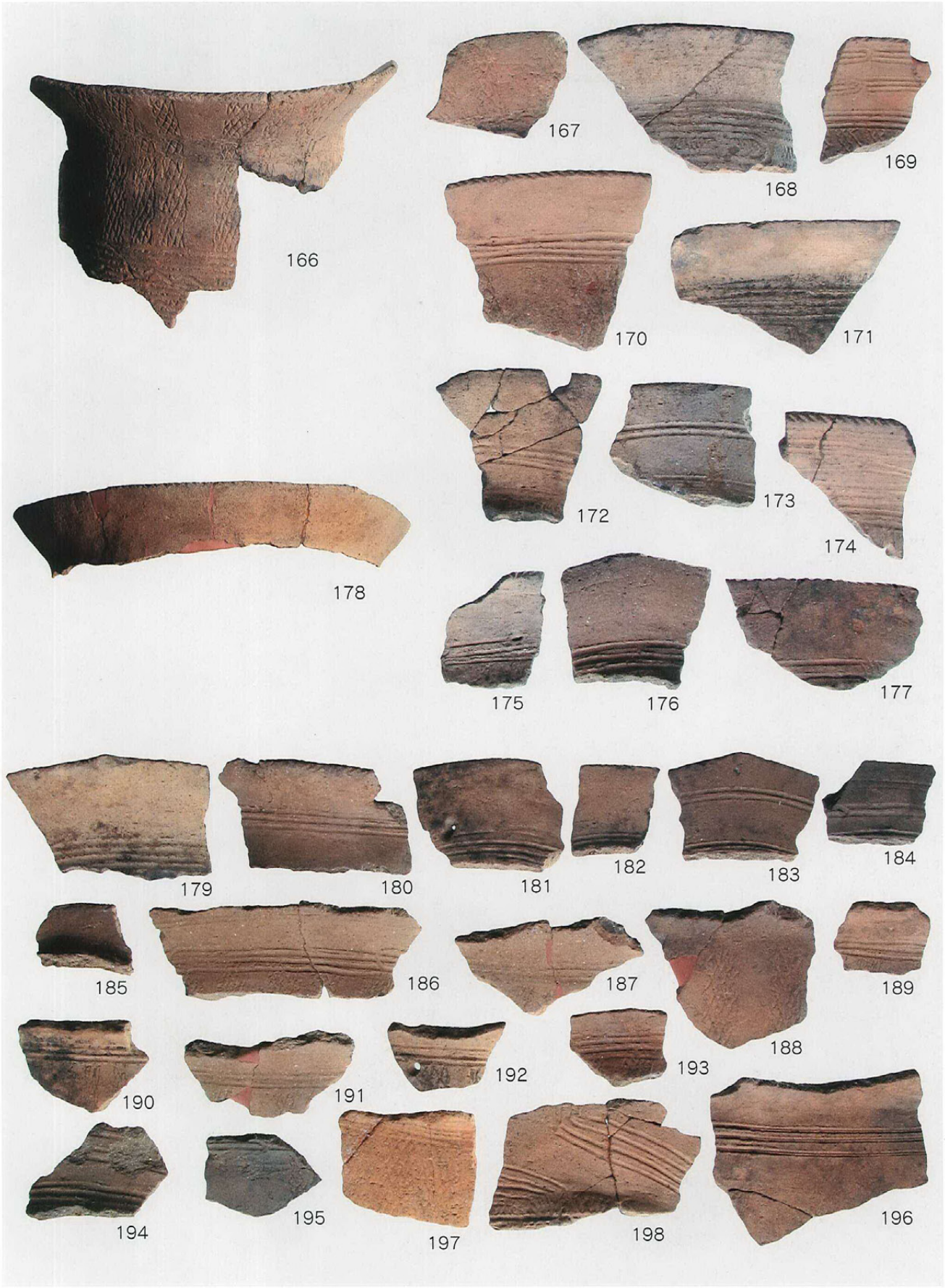
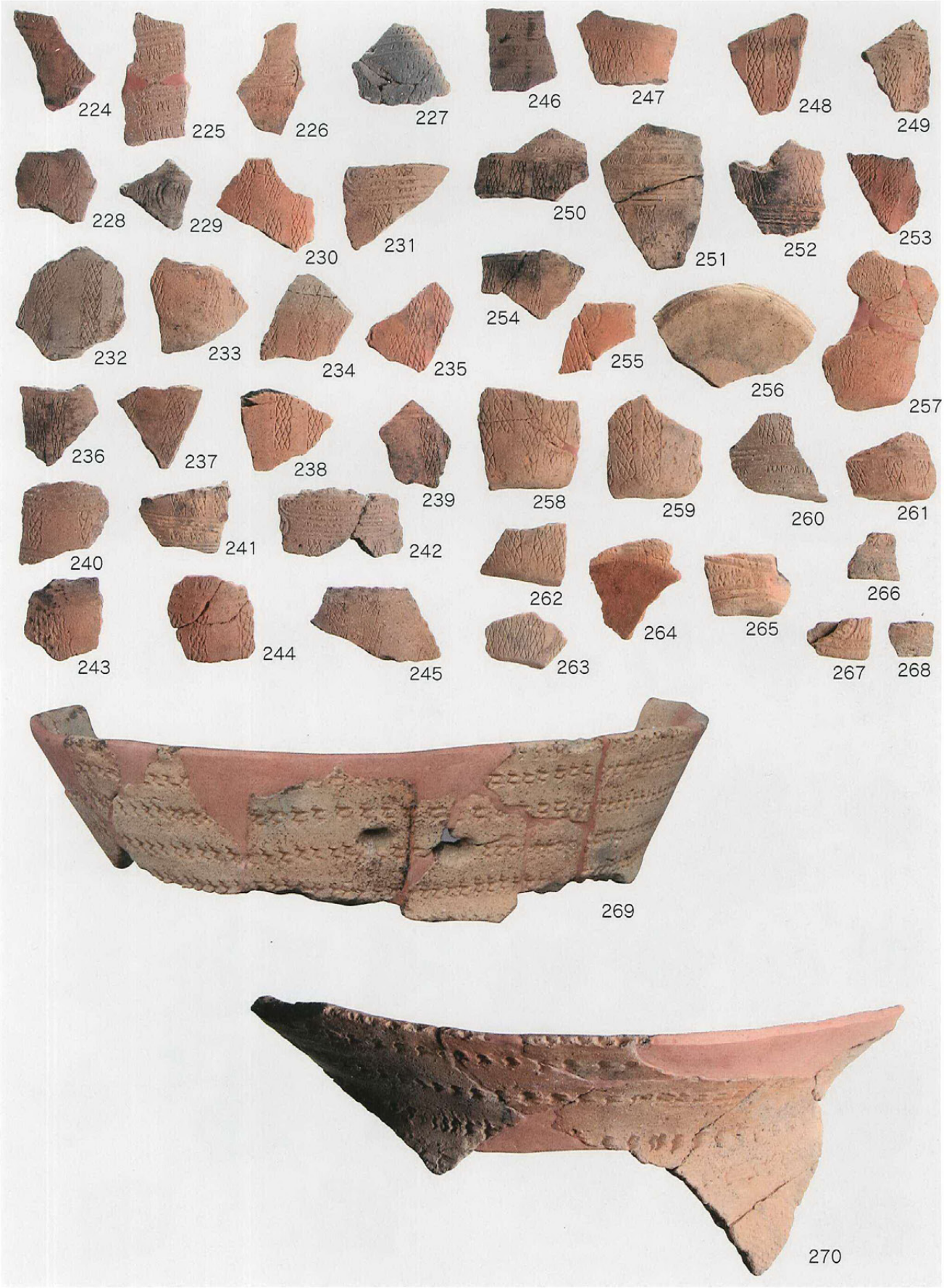
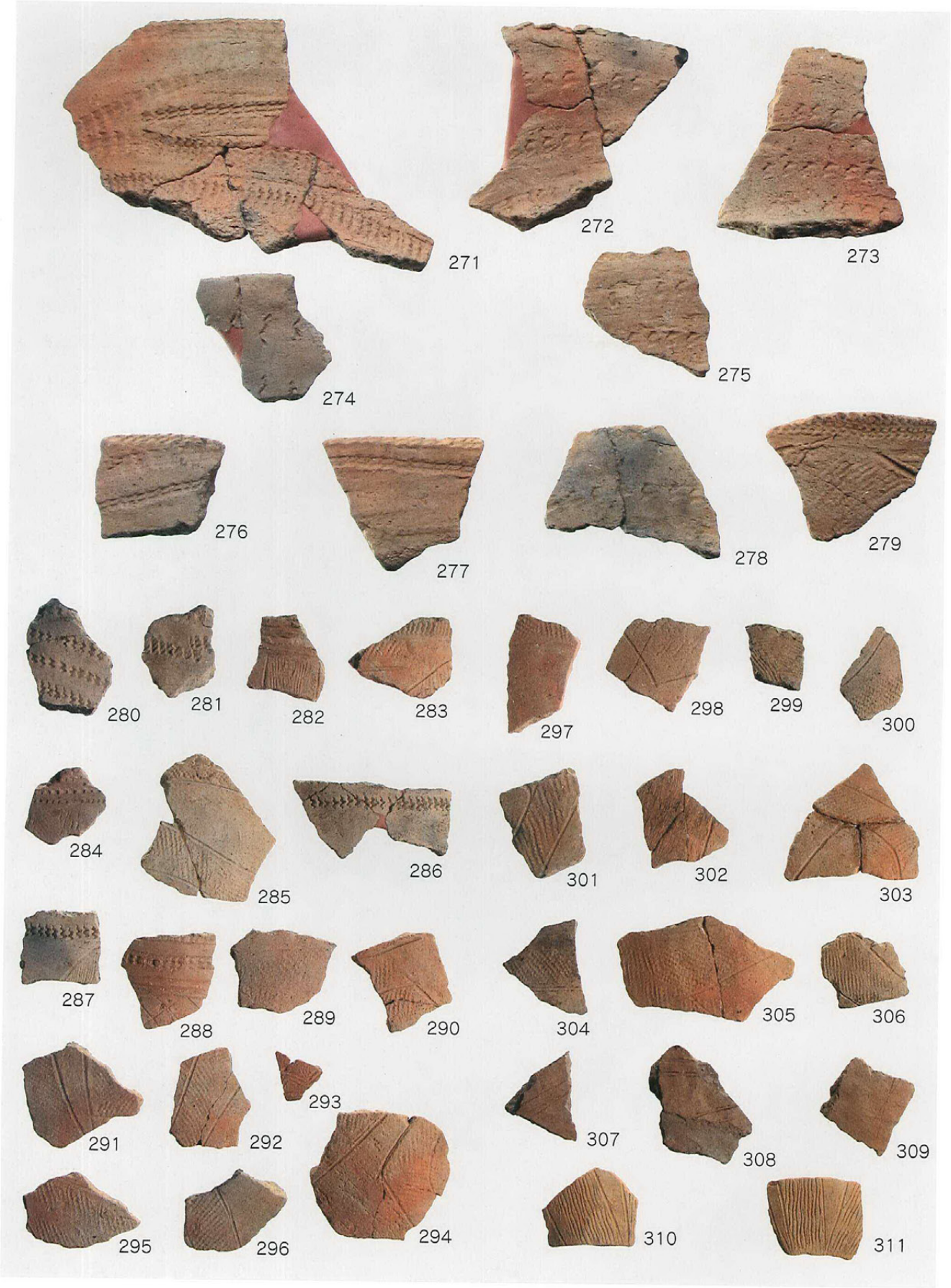


図版41　縄文時代早期遺物包含層出土土器⑦

図版42　縄文時代早期遺物包含層出土土器⑧



図版43　縄文時代早期遺物包含層出土土器⑨

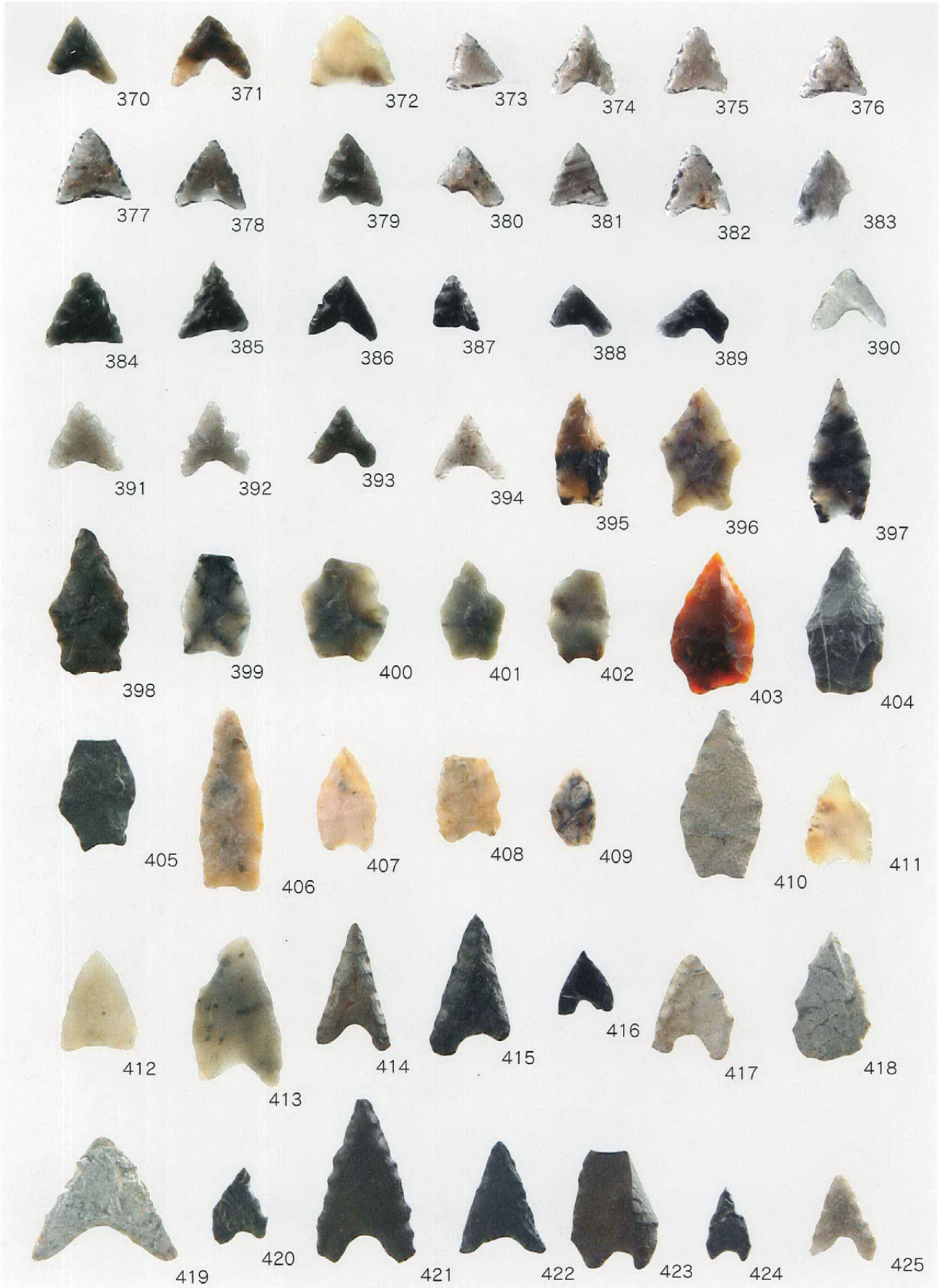


図版44　縄文時代早期遺物包含層出土土器⑩

図版45　縄文時代早期遺物包含層出土土器⑪

図版46　縄文時代早期遺物包含層出土土器⑫

図版47　縄文時代早期遺物包含層出土土製品



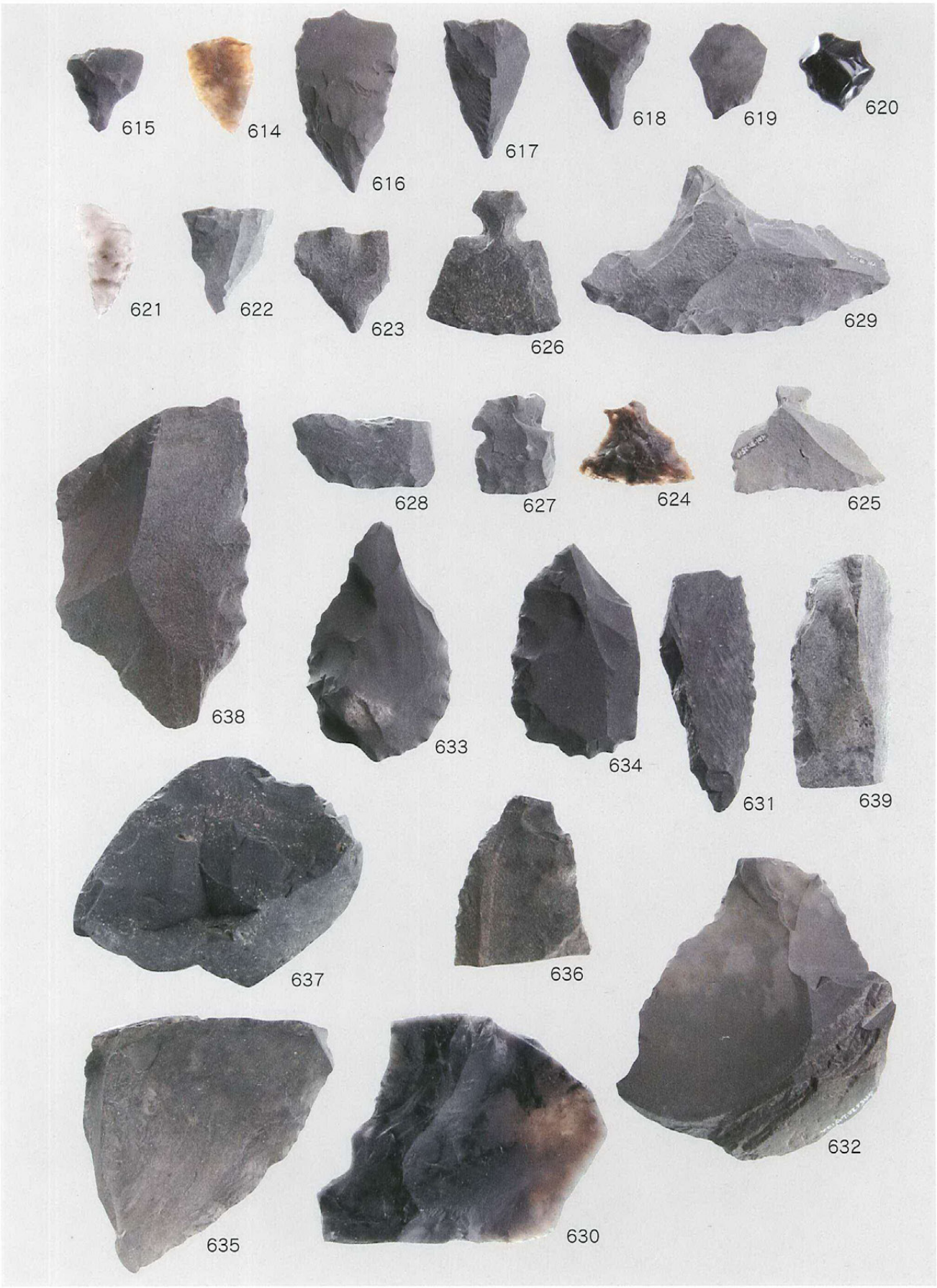
図版48　縄文時代早期遺物包含層出土石器①

図版49　縄文時代早期遺物包含層出土石器②

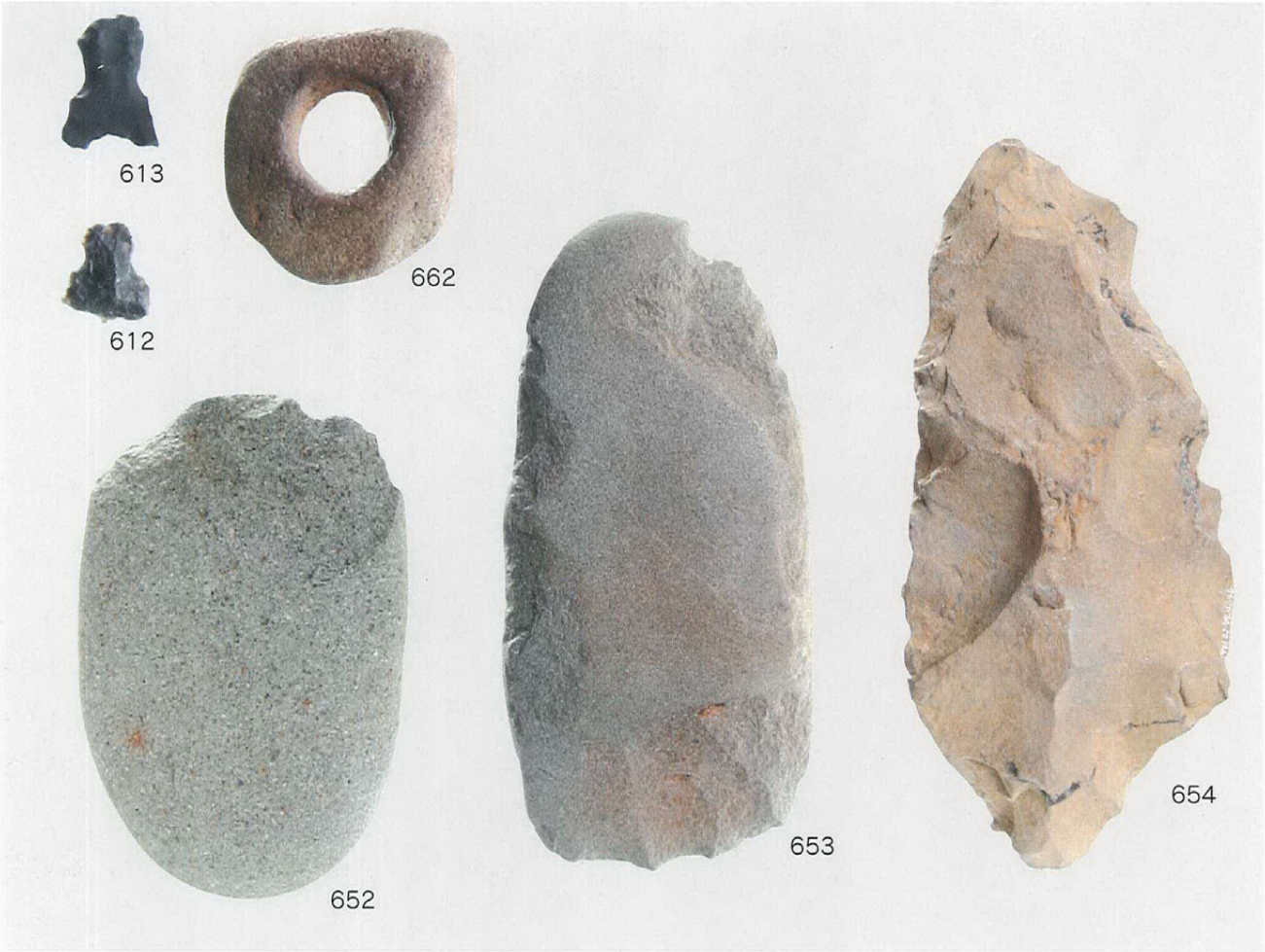
図版50　縄文時代早期遺物包含層出土石器③

図版51　縄文時代早期遺物包含層出土石器④

図版52　縄文時代早期遺物包含層出土石器⑤



図版53　縄文時代早期遺物包含層出土石器⑥



図版54　縄文時代早期遺物包含層出土石器⑦

第Ⅳ章　弥生・古墳時代についての調査

アカホヤ火山灰層上面において、A区より弥生・古墳時代に該当する遺構が検出された。検出された遺構は、竪穴住居跡が５軒・土坑が１基である。検出された遺構の位置関係については、第153図に示すとおりである。遺構は、アカホヤ火山灰層より下位の層まで掘り込んで造られていた。そのため、埋土中に縄文時代の遺物と弥生・古墳時代の遺物が混在していた。

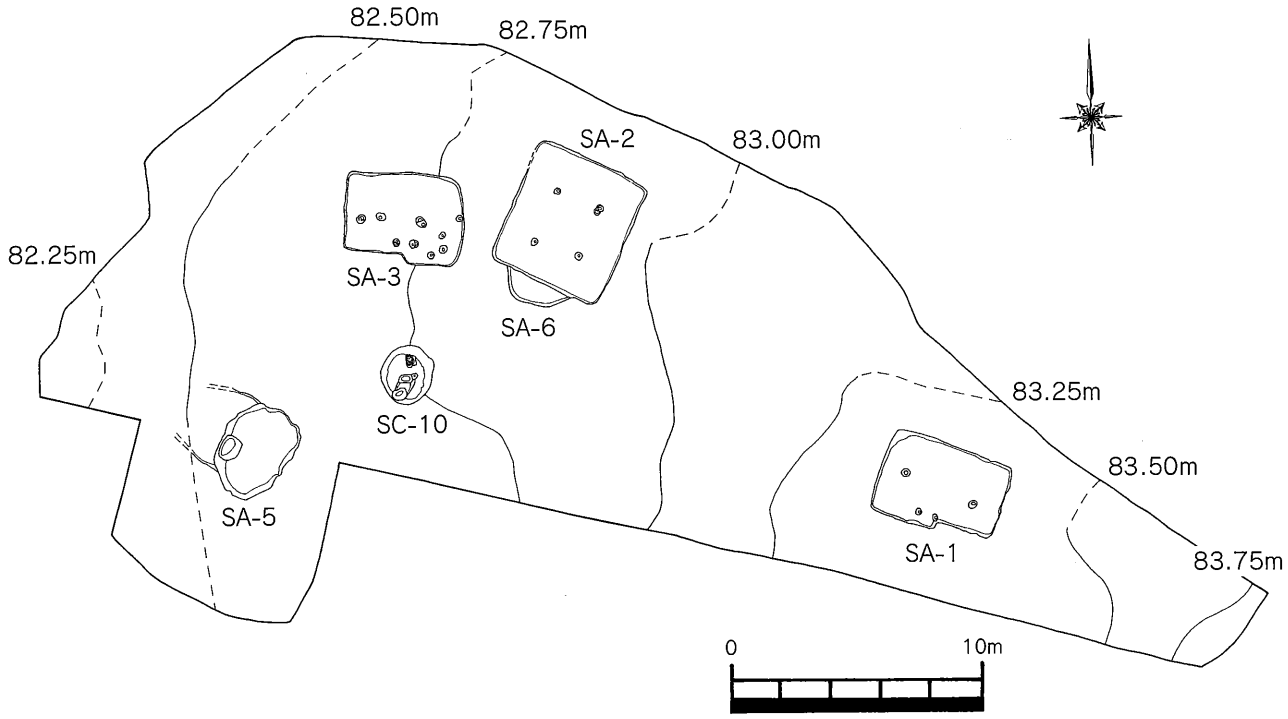
以下、遺構ごとに詳述する。なお、遺構から出土した遺物の観察表・計測表については、第14・15表に示す。

第１節　竪穴住居跡

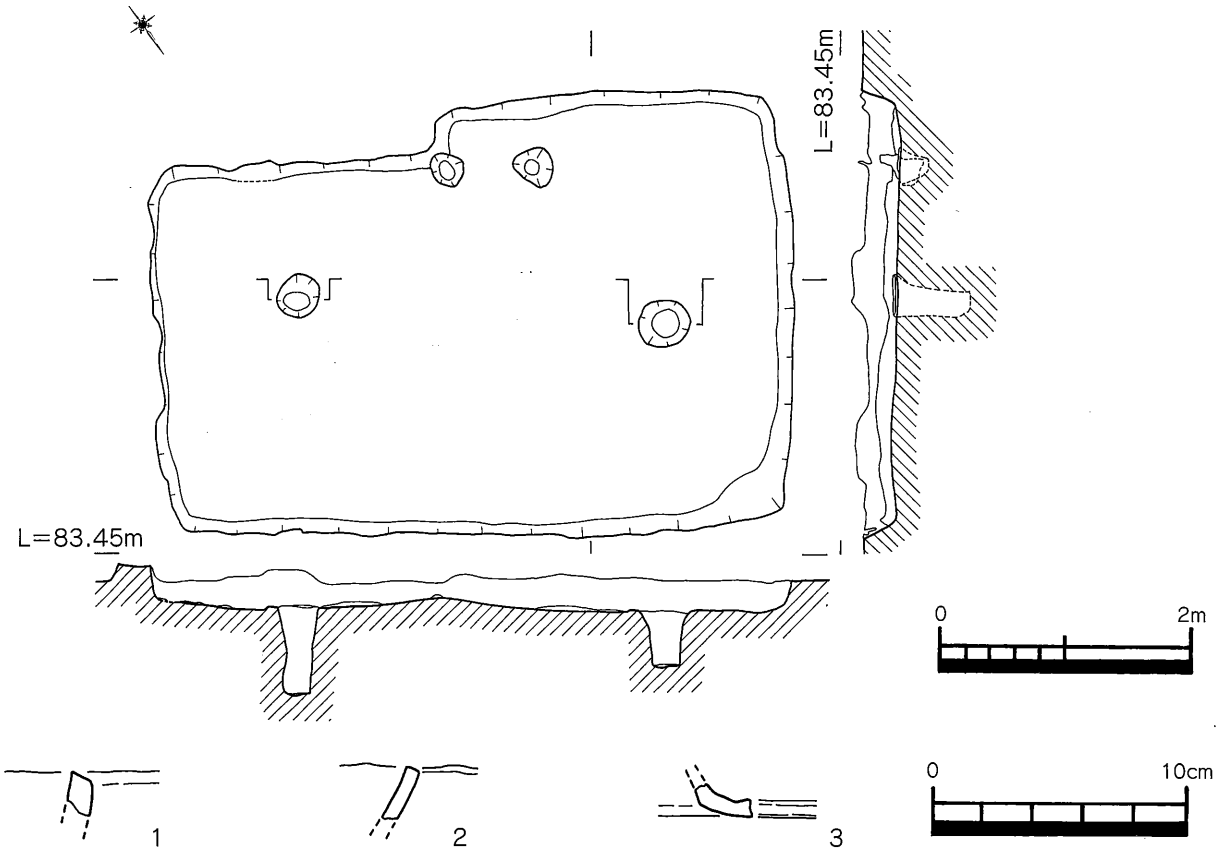
SA-1

A区の東に位置する。プランは長方形であるが、南西側の壁の一部が張り出す形態となっている。規模は長軸5.12m、短軸3.58m、検出面から床面までの深さは0.26mである。柱穴は長軸方向に2本、南壁の近くに2本確認された。柱穴の規模は、径0.32～0.40m、深さ0.44～0.70mである。埋土中から弥生土器片数点が出土した。しかし、出土した土器は細片がほとんどであり、図化できるものが少なかった。

１・２は甕の口縁部である。１・２ともに口唇部は平坦である。３は高杯の脚部である。脚端部はヨコナデにより凹面状にくぼむ。



第153図　A区竪穴式住居群配置図（S＝1/300）



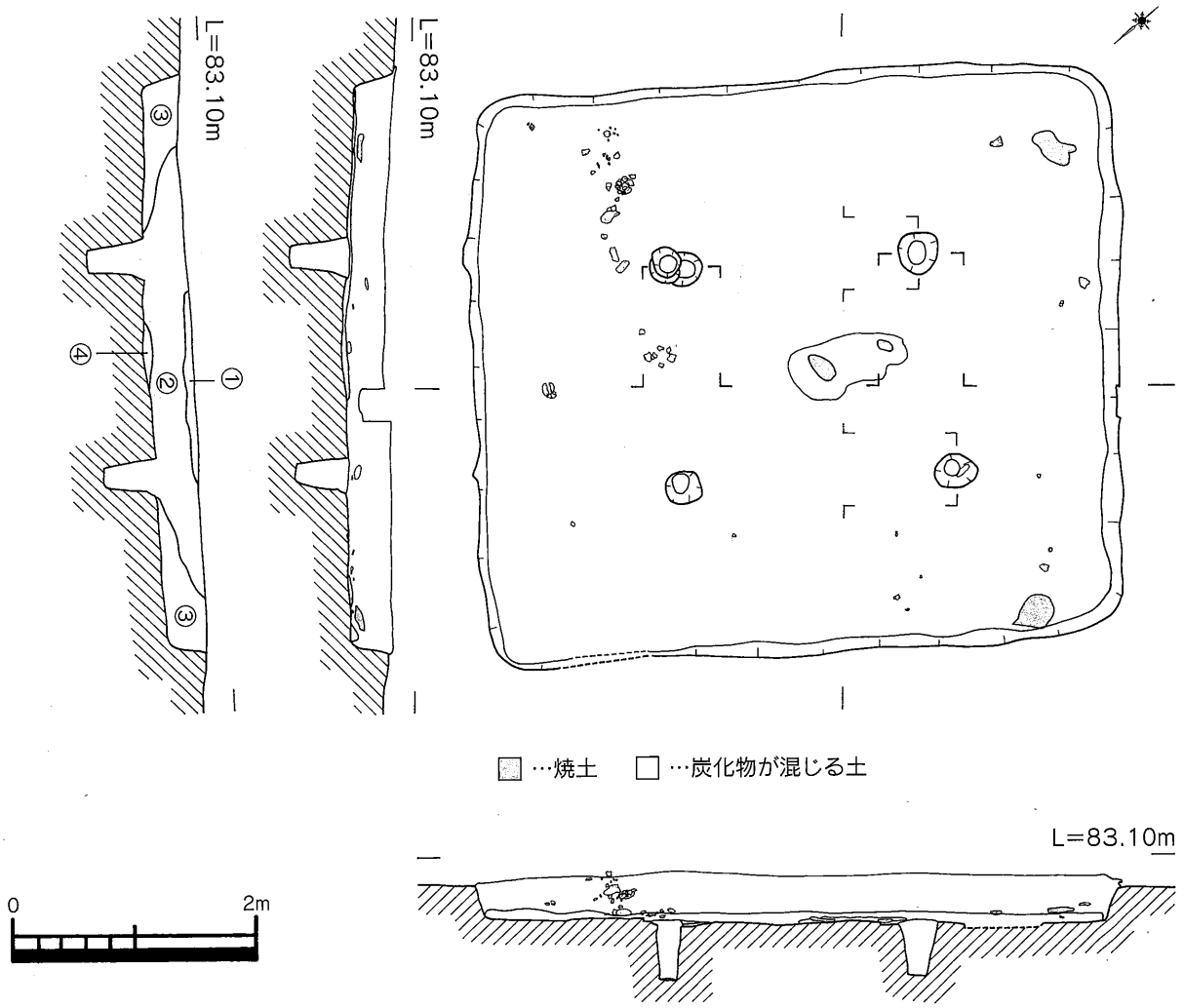
第154図　SA-1実測図（S=1/60）、及びSA-1出土遺物実測図（S=1/3）

SA-2

Ａ区のほぼ中央に位置する。本住居址はSA-6を切る形で検出された。プランは略正方形である。規模は長軸5.25m、短軸4.76m、検出面から床面までの深さは、0.40mである。柱穴は４本確認された。柱穴の規模は、径0.20～0.35m、深さ0.42～0.50mである。住居中央部から炭化物に混じり焼土が検出された。埋土中から弥生土器片･土師器片が混在して出土した。

しかし、４本主柱をもつ略正方形プランの住居であることやSA-6を切っていることを考慮すると、本来SA-2に帰属する遺物は土師器片であったと思われる。SA-2から出土した弥生土器片は、本来SA-6に帰属する遺物であろう。遺物の中には住居の床面から出土した遺物もあったが、いずれも細片で図化できる資料はなかった。

４～７は甕である。４は胴部中位に最大径をもつ甕である。頸部に明瞭な稜線をもつ。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口唇部は舌状に薄く尖り、わずかに外反する。外面調整は口縁部から胴部上位が縦方向の板状工具によるナデ、胴部下位が斜方向の板状工具によるナデである。内面調整はナデである。５は口縁部である。口縁部上位がやや肥厚する。屈曲部をもたないタイプの甕と思われる。外面調整は口縁部が指オサエ、胴部がナデである。内面調整は口縁部がナデ、胴部が横方向のハケメである。６･７は底部である。６は平底である。接合痕から、粘土紐を輪上にしてすえ、これをベースに底部を成形したものと思われる。調整は内外面ともナデである。７はわずかな上げ底を呈する。調整は外面がナデ･指オサエ、内面がナデである。８～10は鉢である。８の口唇部は薄く、丸くおさまる。調整は内外面ともナデである。９は浅鉢の口縁部と思わ

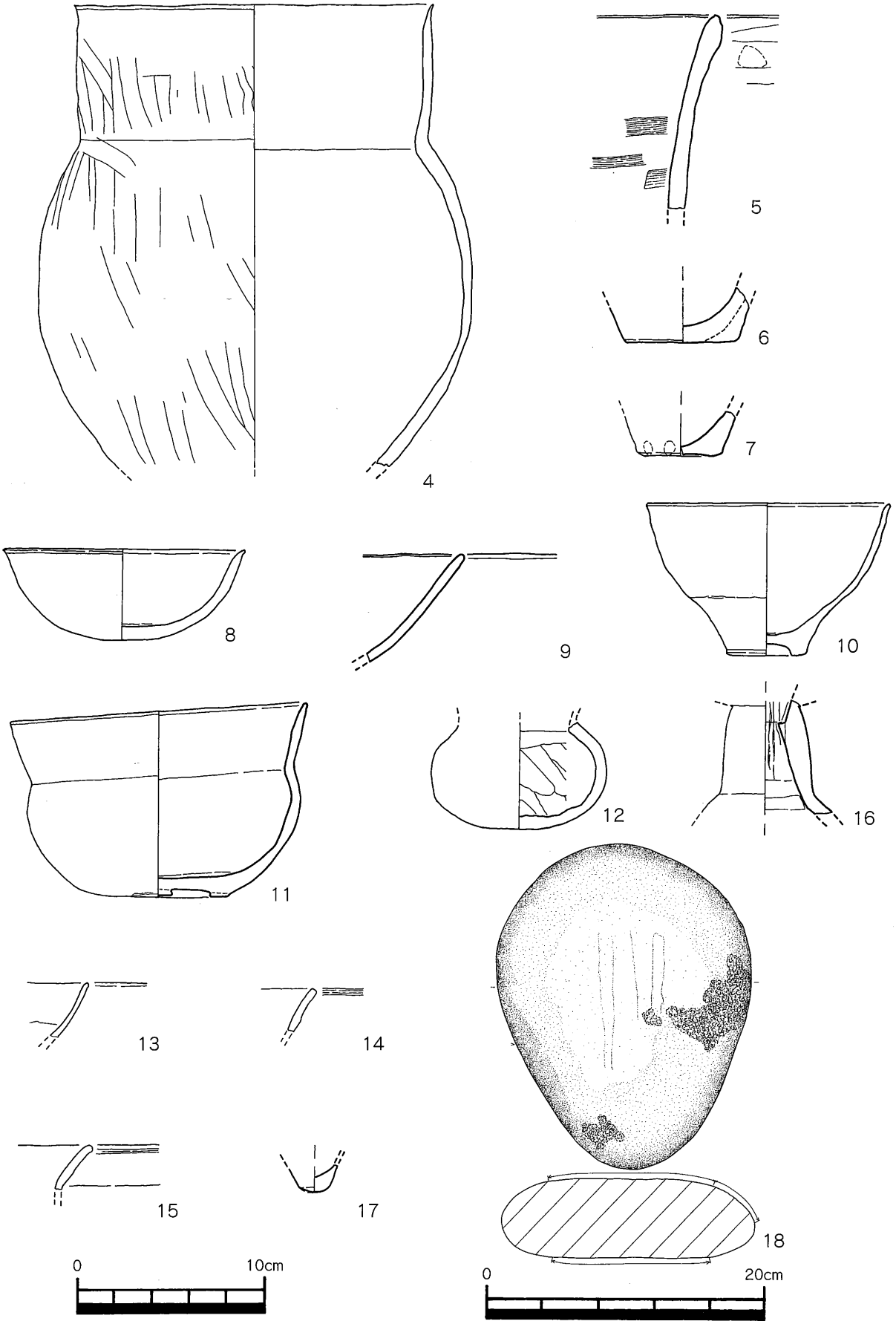


SA-2土層注記

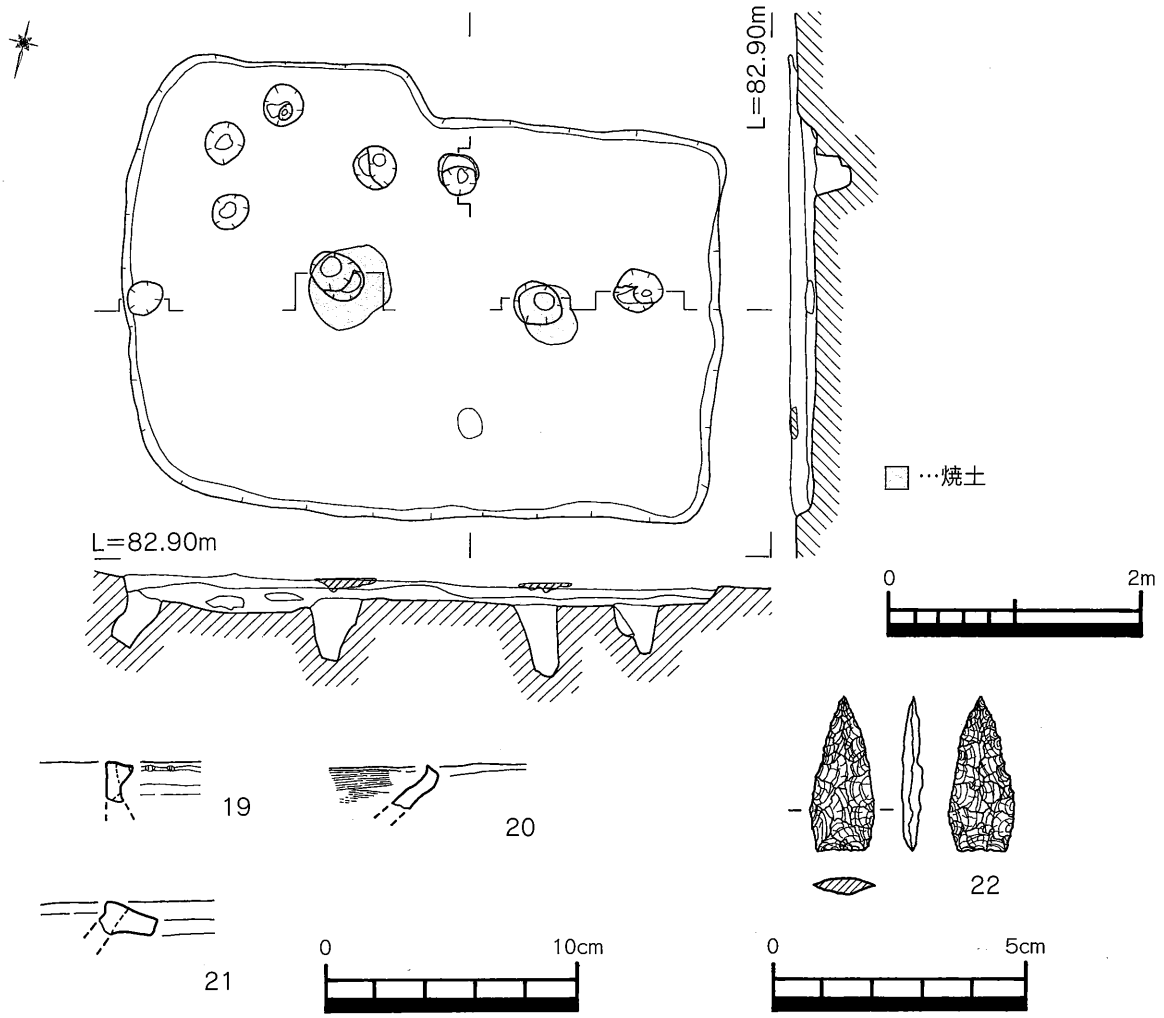
①10YR3/1（黒褐色）シルト質ローム　10YR3/3（暗褐色）シルト質ロームを1％、炭化粒を5％含む。
②10YR3/3（暗褐色）シルト質ローム　10YR3/2（黒褐色）シルト質ロームを1％、径0.5～1cmのAh及び、5層ブロックを0.5％、炭化粒を0.5％含む。（＊この炭化粒は②層の下位へいく程多く含まれる。）
③10YR4/6（褐色）　シルト質ローム　径0.5～1cmのAh及び5層ブロックを1％、炭化物及び炭化粒を3％含む。
④10YR3/2（黒褐色）シルト質ローム　10YR4/6（褐色）シルト質ロームを5％、炭化物及び炭化粒を3％含む。

第155図　SA-2実測図（S＝1/60）

れる。調整は内外面ともヨコナデ･ナデである。10は上げ底の脚台もつ。口唇部はわずかに外反する。胴部下位には接合痕が残る。調整は内外面ともナデである。11～15は小型丸底壷である。11は平底の底部に粘土紐を付加することにより上げ底状の底部を成形したものである。調整は内外面ともナデである。12は内面に強い指ナデによる単位が明瞭に残る。13～15は口縁部である。いずれの調整もナデもしくはヨコナデである。13は精製された胎土で成形されている。16は高坏の脚部である。明瞭な屈曲部をもつ。内面には、充填した粘土をナデつけたと思われる痕跡が残る。外面調整はナデ、内面調整はシボリのちナデである。17はミニチュア土器の底部である。調整は内外面ともナデである。18は砂岩製の石皿である。



第156図　SA-2出土遺物実測図（土器：S=1/3、石器：S=1/4）

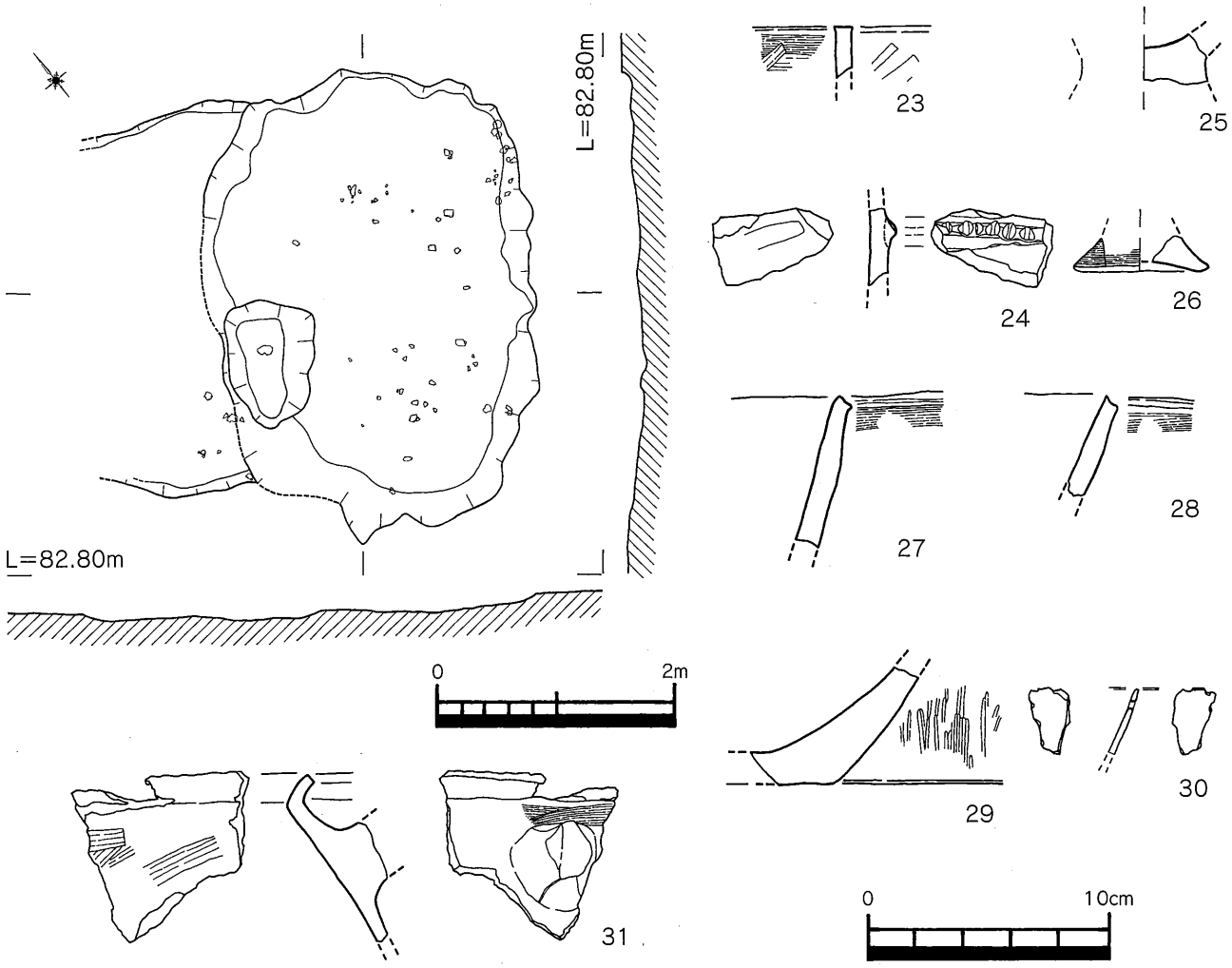


第157図　SA-3実測図（S＝1/60）、及びSA-3出土遺物実測図（土器：S＝1/3、石器：S＝2/3）

SA-3

A区の西側、SA-2から西へ約1.5mの地点に位置する。プランは長方形である。南側の壁の一部が張り出す形態となっている。SA-1とほぼ同様のプランを呈する。規模は長軸4.75m、短軸3.20m、検出面から床面までの深さは0.20mである。柱穴は不規則に配置されており、８本検出された。柱穴の規模は、径0.20～0.40m、深さ0.30～0.58mである。住居中央部から焼土が検出された。埋土中から弥生土器片数点が出土した。しかし、出土した土器は細片がほとんどであり、図化できるものが少なかった。

19･20は甕である。19は口唇部に刻目突帯文をもつ。残存状況はあまり良くないが、口縁部下位にも突帯をもつようである。刻目は縦方向に施す。外面調整はヨコナデ、内面調整はナデである。20ははねあげ口縁をもつものである。口唇部は平坦である。外面調整はナデ、内面調整は横方向のハケメである。21は壺の口縁部である。口縁部が鋤先状を呈するものである。口縁部内面に突起をもつ。調整は内外面ともナデである。22はチャート製の打製石鏃である。最大幅は胴部中央よりやや下位にある。基部には非常に浅い抉りがはいる。いわゆる「帖地型石鏃Aタイプ」である。縄文時代早期に概当する遺物であり、SA-3に伴うものではない。

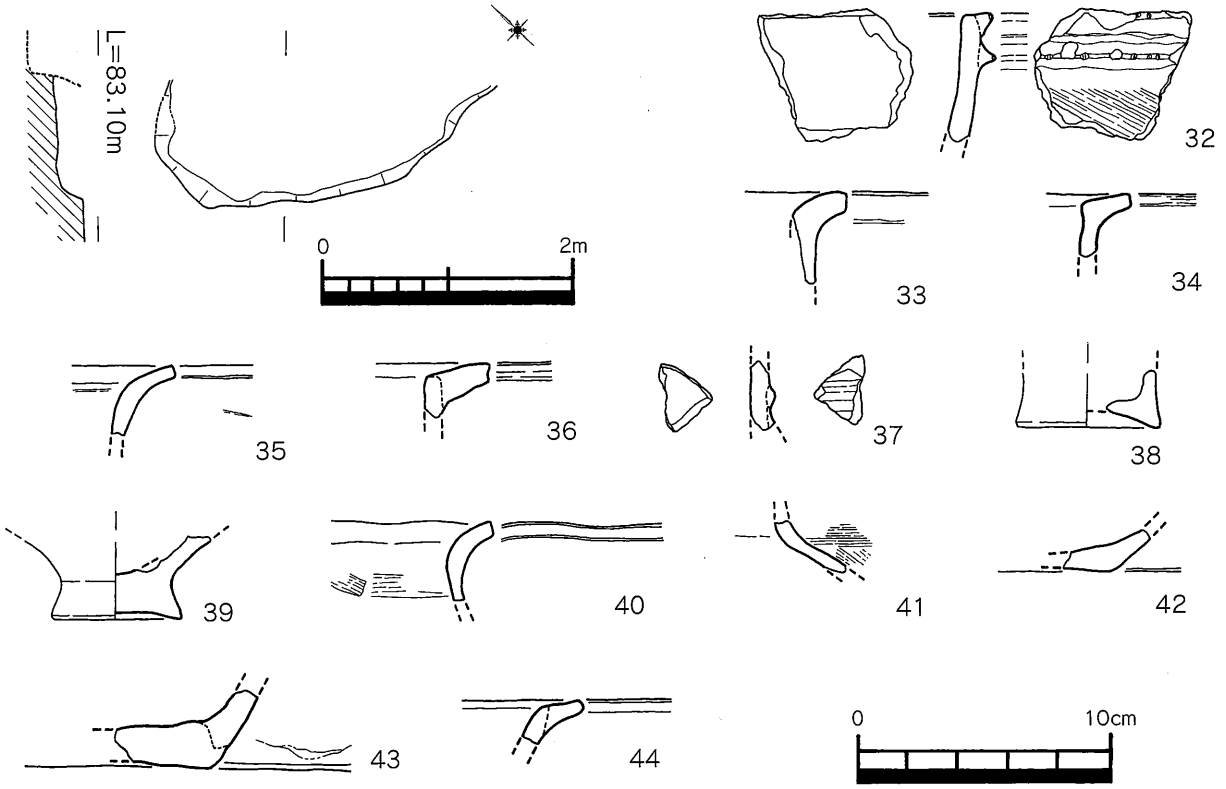


第158図　SA-5実測図（S＝1/60）、及びSA-5出土遺物実測図（S＝1/3）

SA-5

A区の南西に位置する。竪穴状遺構が2基切りあっている可能性があるが、撹乱の影響で明確なプランは確認できなかった。規模は長軸4.00m、短軸残存長3.60mである。検出面から床面までの深さは0.10m～0.18mである。柱穴は検出されていない。埋土中から弥生土器片数点が出土した。

23～26は甕である。23は口縁部である。口唇部は平坦面をもつ。調整は内外面とも板状工具によるナデである。24は胴部である。縦位の刻目突帯文をもつ。外面調整はナデ、内面調整はナデ･板状工具によるナデである。25･26は底部である。25の調整は内外面ともナデである。26はややあげ底で脚台状を呈する。調整はナデ･横方向のハケメである。27･28は壺の口縁部と思われる。口唇部はヨコナデによりわずかに凹む。外面調整はナデ･横方向のハケメ、内面調整はナデである。29は壺の底部である。外面に縦方向のミガキを施す。30は小形壺の口縁部と思われる。精製された胎土で、器壁も薄い。口縁直下に穿孔をもつ。調整は内外面ともナデである。31は把手付甕である。口縁部は短く、くの字状を呈する。口唇部は平坦である。胴部上位に把手がつくものと思われる。



第159図　SA-6実測図（S=1/60）、及びSA-6出土遺物実測図（S=1/3）

SA-6

A区のほぼ中央に位置する。本住居址はSA-2に切られる形で検出された。プランは、遺構の大部分を消失しているため不明である。規模は長軸残存長2.65m、短軸残存長0.95m、検出面から床面までの深さは0.20mである。柱穴は検出されていない。埋土中からは土器片が出土したが、いずれも細片で図化できるものはなかった。そのため、本来SA-6に帰属する遺物と考えられるSA-2出土の弥生土器片について詳述する。

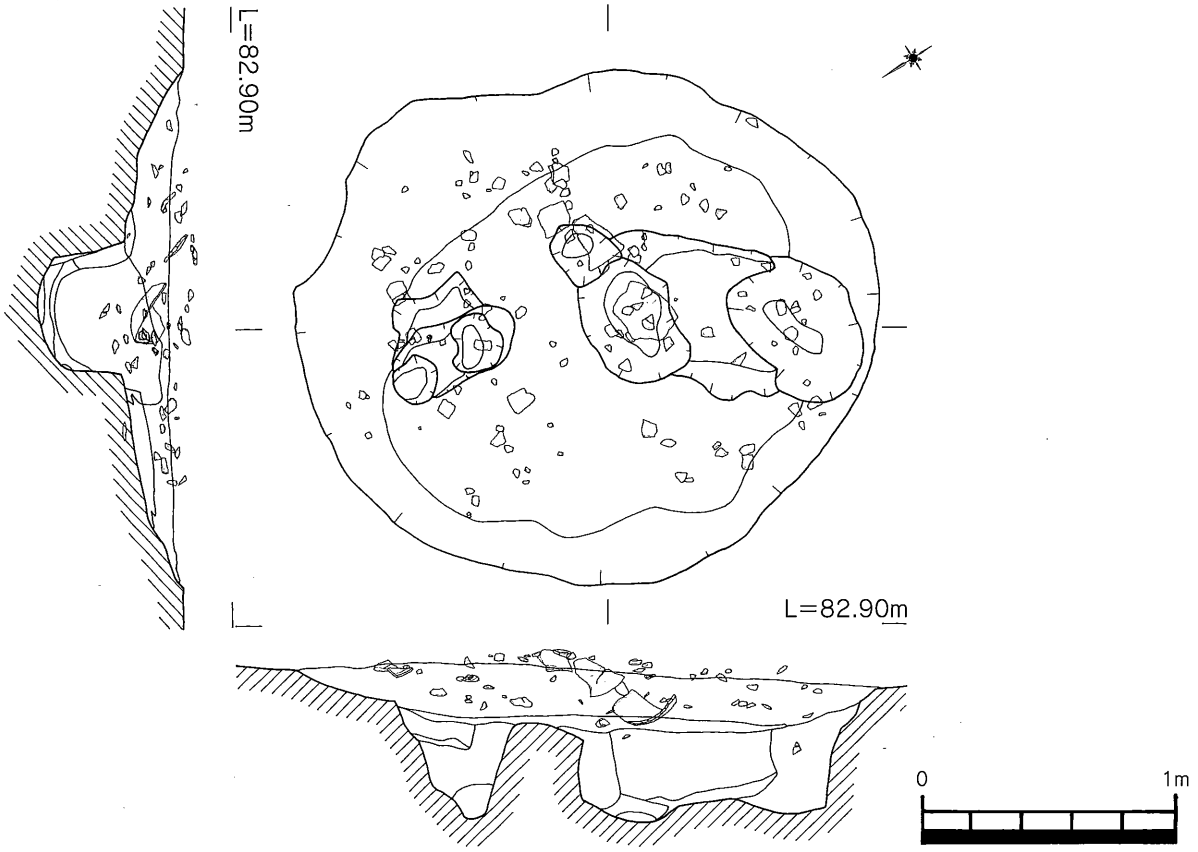
32～40は甕である。32は口唇部と口縁部下に縦位の刻目突帯文を施す。外面調整は突帯部分がヨコナデ、胴部が斜位のハケメである。内面調整はナデである。33～35は、逆「L」字状を呈する口縁部である。33の調整は内外面ともヨコナデである。34の口縁部内面はわずかに張り出す。調整は内外面ともヨコナデである。35の調整は内外面ともナデである。36は山ノ口式土器の口縁部である。胎土に金雲母を含む。口唇部は強いヨコナデにより凹線状にくぼむ。37は三角突帯をもつ胴部である。36と同様の胎土であることから山ノ口式土器の可能性が高いと思われる。調整は内外面ともナデである。38･39は底部片である。38は上げ底で端部がわずかに張り出す。調整はナデである。39は上げ底で脚台状を呈する。調整はヨコナデ･ナデである。40～43は壷である。40は短頸壷の口縁部である。外面調整はナデ、内面調整はナデ･横方向のハケメである。41は頸部である。外面調整はハケメ、内面調整がナデである。42･43は底部である。調整は内外面ともナデである。44は高坏である。口縁部は短く、斜め上方に延びる。調整は内外面ともナデである。

第２節　土坑

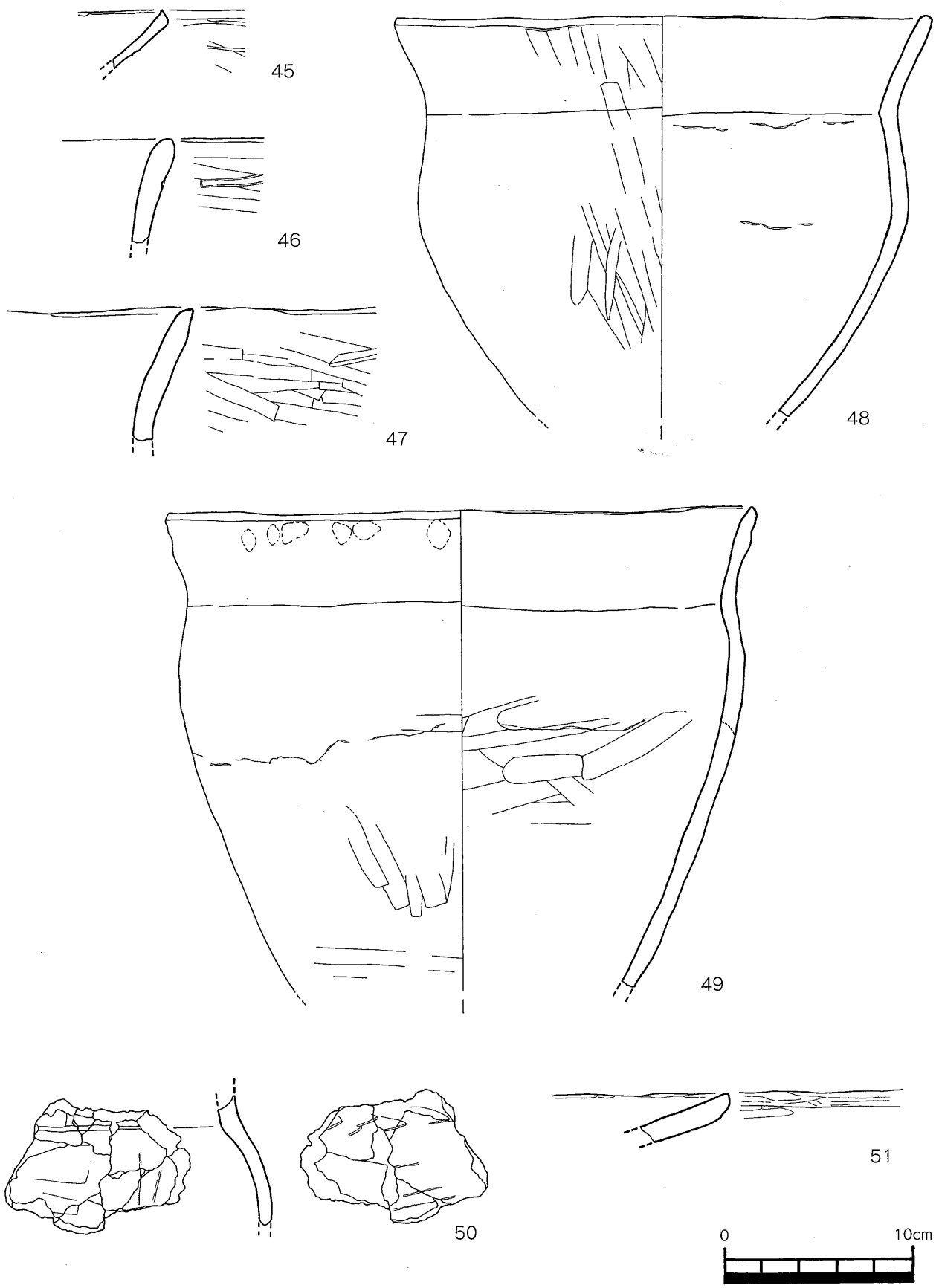
SC-10

Ａ区南西に位置する。プランは不整円形である。断面形状は皿状を呈する。規模は径2.20ｍである。検出面から床面までの深さは0.26ｍである。床面から長軸0.53ｍ、短軸0.37ｍ、深さ0.40ｍの竪穴が１基、長軸1.11ｍ、短軸0.62ｍ、深さ0.43ｍの竪穴が1基の計２基が検出された。土坑中央部から焼土が検出された。

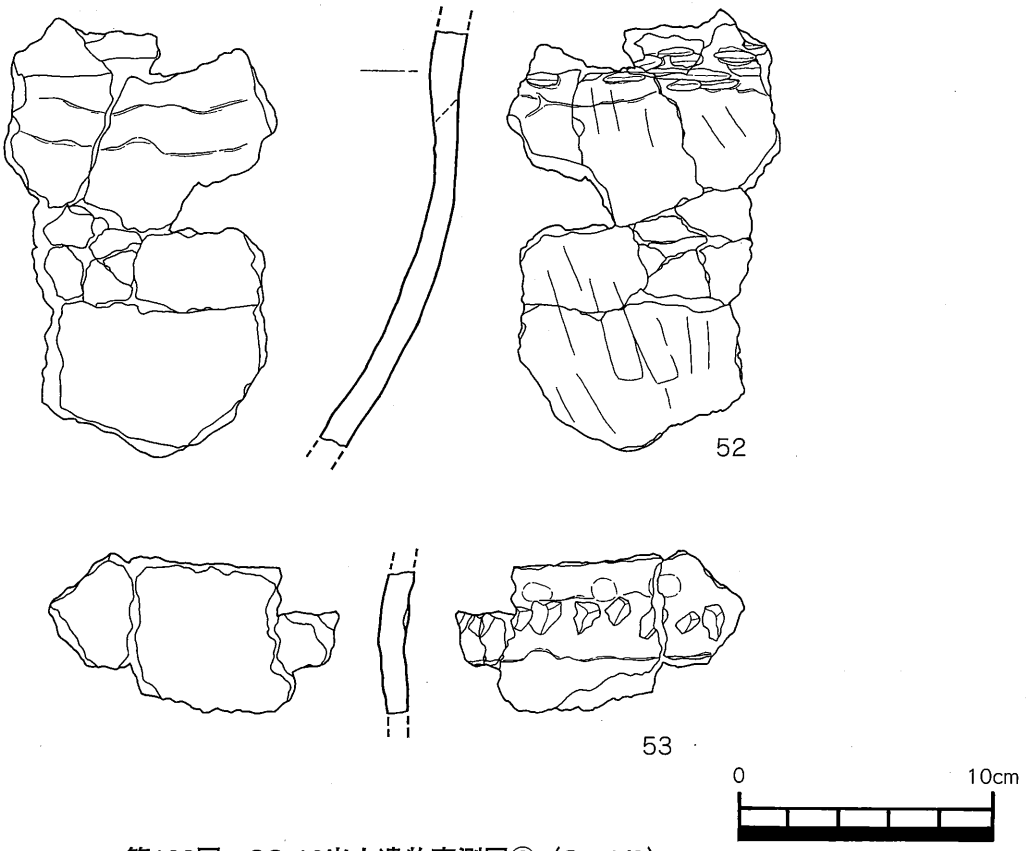
45～49、52･53は甕である。45ははねあげ口縁である。外面調整はナデ･板状工具によるナデである。内面調整はナデである。46･47は49と同タイプの甕の口縁部であろう。46･47ともに外面調整が横方向の板状工具によるナデ、内面調整がナデである。48･49は胴部上位に最大径をもつ甕である。48は頸部に明瞭な稜線をもつ。口縁部は外傾し、端部は丸くおさめる。外面調整は縦方向･斜方向の板状工具によるナデ、内面調整はヨコナデである。内面には接合痕が残る。49は頸部があまりくびれず、明瞭な稜線をもたない。口縁部は外傾し、端部は丸くおさめる。調整は内外面ともにヨコナデ及び横方向の板状工具によるナデである。内面には接合痕が残る。52･53は頸部に刻目をもつ甕である。52は横方向、53は斜方向の刻目をもつ。50は壷である。調整は内外面とも板状工具によるナデである。51は浅鉢の口縁部と思われる。調整は内外面ともナデであるが、口唇部のみミガキを施す。



第160図　SC-10実測図（S=1/30）



第161図　SC-10出土遺物実測図①（S=1/3）



第162図　SC-10出土遺物実測図②（S＝1/3）

第14表　弥生土器・土師器観察表

遺構No	出土地点	器種	残存部位	文様及び調整 外面	文様及び調整 内面	色調 外面	色調 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	備考	遺物整理No
1	SA1	甕	口縁部	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	7.5YR4/3 褐	5YR4/3 にぶい赤褐					603
2	SA1	甕	口縁部	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR5/4 にぶい黄褐					604
3	SA1	高坏	脚裾部	ヨコナデ・ナデ	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/2 灰黄褐					605
4	SA2	甕	口縁～胴部	板状工具によるナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	18.8			反転復元。スス付着。	274
5	SA2	甕	口縁～胴部	ナデ・指オサエ	ナデ・ハケメ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐					628
6	SA2	甕	底部	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR4/2 灰黄褐		5.8			644
7	SA2	甕	底部	ナデ・指オサエ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐		5.5			625
8	SA2	小形鉢	口縁～底部	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐	12.7	2.1	4.8		272
9	SA2	浅鉢	口縁～胴部	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐					629
10	SA2	小形鉢	口縁～底部	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	12.8	2.9	8.1		273
11	SA2	小形丸底壺	口縁～底部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄橙	15.7	4.5	4.5		271
12	SA2	小形丸底壺	頸部～底部	ナデ	強い指ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR4/2 灰黄褐		1.1			270
13	SA2	小形丸底壺	口縁部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐					638
14	SA2	小形丸底壺	口縁部	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR5/3 にぶい褐					637
15	SA2	小形丸底壺	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙					636
16	SA2	高坏	脚部	ナデ	ナデ・板状工具によるナデ・シボリ	5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐					626
17	SA2	ミニチュア土器	底部	ナデ	ナデ	5YR5/6 明赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐					633
19	SA3	甕	口縁部	ヨコナデ	ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙					606

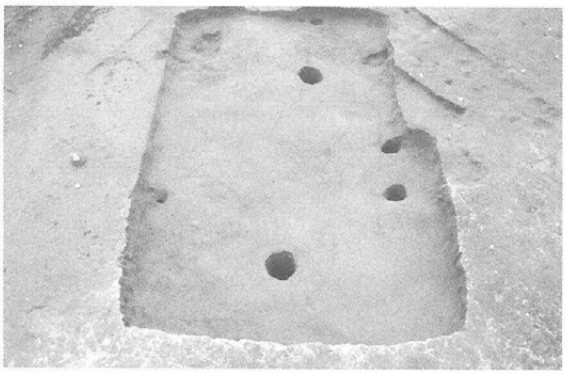
遺構No	出土地点	器種	残存部位	文様及び調整		色調		法量（cm）			備考	遺物整理No
				外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高		
20	SA3	甕	口縁部	ナデ	ハケメ	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR5/4 にぶい赤褐					608
21	SA3	壺	口縁部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙					607
23	SA5	甕	口縁部	板状工具によるナデ	ハケメ	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5Y5/3 黄褐					613
24	SA5	甕	胴部	ヨコナデ・刻目突帯文	板状工具によるナデ・ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙					611
25	SA5	甕	底部	ナデ	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR3/1 黒褐					612
26	SA5	甕	底部	ハケメ・ナデ	—	10YR5/4 にぶい黄褐	—					610
27	SA5	壺	口縁部	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐				スス付着。	617
28	SA5	壺	口縁部	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐				スス付着。	616
29	SA5	壺	底部	ミガキ	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR5/3 にぶい黄褐					609
30	SA5	小形壺	口縁部	ナデ	ナデ	7.5YR6/5 橙	7.5YR6/4 にぶい橙				穿孔アリ。	614
31	SA5	甕	口縁～胴部	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐				把手付。	615
32	SA2	甕	口縁～胴部	ヨコナデ・刻目突帯文・ハケメ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙				SA6に帰属する遺物と考えられる。	632
33	SA2	甕	口縁～頸部	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR4/2 灰黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙				SA6に帰属する遺物と考えられる。	634
34	SA2	甕	口縁～頸部	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙				SA6に帰属する遺物と考えられる。	639
35	SA2	甕	口縁～頸部	ナデ	ナデ	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙				SA6に帰属する遺物と考えられる。	651
36	SA2	甕	口縁～頸部	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	2.5YR5/6 明赤褐				SA6に帰属する遺物と考えられる。胎土に金雲母を含む。	630
37	SA2	甕	胴部	ナデ	ナデ	7.5YR4/4 褐	7.5YR5/4 にぶい褐				SA6に帰属する遺物と考えられる。胎土に金雲母を含む。	649
38	SA2	甕	底部	ナデ	—	7.5YR5/4 にぶい褐	—				SA6に帰属する遺物と考えられる。反転復元。	640
39	SA2	甕	底部	ヨコナデ・ナデ	ナデ	10YR4/3 にぶい黄褐	7.5YR5/4 にぶい褐				SA6に帰属する遺物と考えられる。反転復元。	627
40	SA2	壺	口縁～頸部	ナデ	ハケメ・ナデ	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/4 にぶい褐				SA6に帰属する遺物と考えられる。	635
41	SA2	壺	頸部	ハケメ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐				SA6に帰属する遺物と考えられる。スス付着。	646
42	SA2	壺	底部	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐				SA6に帰属する遺物と考えられる。	642
43	SA2	壺	底部	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/3 褐				SA6に帰属する遺物と考えられる。	641
44	SA2	高坏	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	2YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐				SA6に帰属する遺物と考えられる。	643
45	SC10	甕	口縁部	ナデ・板状工具によるナデ・沈線	ナデ	2.5Y4/2 暗灰黄	2.5Y4/1 黄灰				スス付着。	618
46	SC10	甕	口縁部	ナデ・板状工具によるナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐					619
47	SC10	甕	口縁～頸部	ナデ・板状工具によるナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐					620
48	SC10	甕	口縁～胴部	ナデ・板状工具によるナデ	ヨコナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/3 褐	28.6			スス付着。反転復元。	790
49	SC10	甕	口縁～胴部	ヨコナデ・ヨコナデのち指オサエ・板状工具によるナデ・ナデ	ヨコナデ・板状工具によるナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	31			スス付着。反転復元。	791
50	SC10	壺	頸部～胴部	板状工具によるナデ	板状工具によるナデ・ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR5/2 灰褐					624
51	SC10	浅鉢	口縁部	ミガキ・ナデ	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/3 褐					621
52	SC10	甕	頸部～胴部	ヘラ状工具による刻目・板状工具によるナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR4/4 にぶい赤褐					622
53	SC10	甕	頸部～胴部	ナデのち指オサエ・板状工具による刻目・ナデ	ナデ	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐				スス付着。	623

第15表　弥生・古墳時代遺構内出土石器計測表

遺物No.	整理No.	器　種	遺構番号	石　材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備　考
18	95	石皿	SA-2	砂岩	23.35	18.25	4.9	3650	
22	885	打製石鏃	SA-3	チャート	3.1	1.3	0.4	1.4	帖地型石鏃A

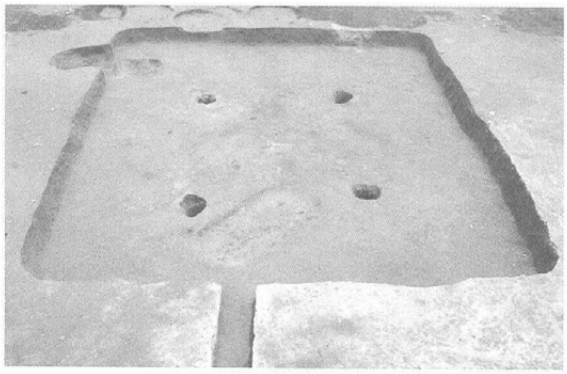
図版55　A区竪穴式住居跡群（南西から）

図版56　A区竪穴式住居跡群（東から）

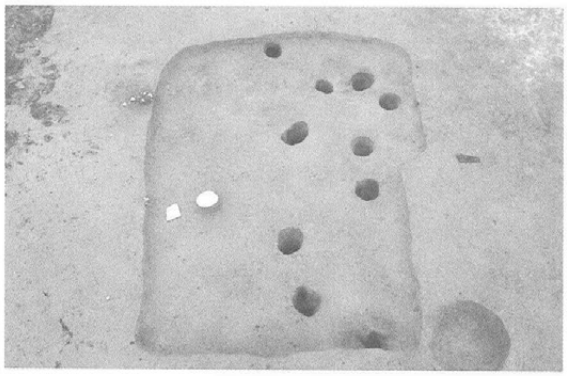


図版57　SA-1完掘状況（西から）

図版58　SA-2･6検出状況（南から）

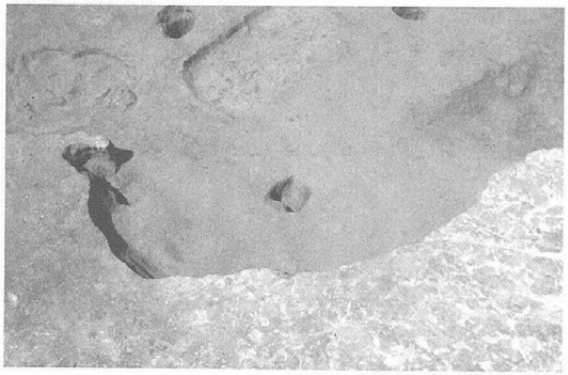


図版59　SA-2完掘状況（南から）

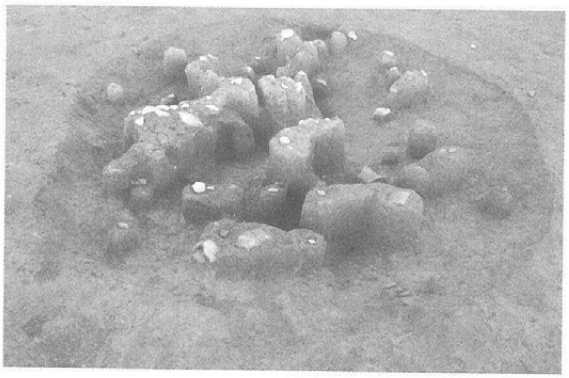


図版60　SA-3完掘状況（西から）

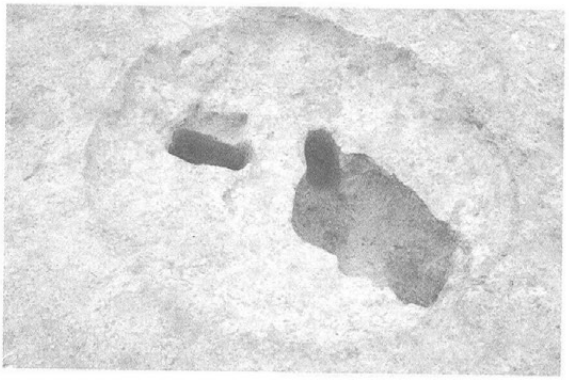
図版61　SA-5完掘状況（東から）



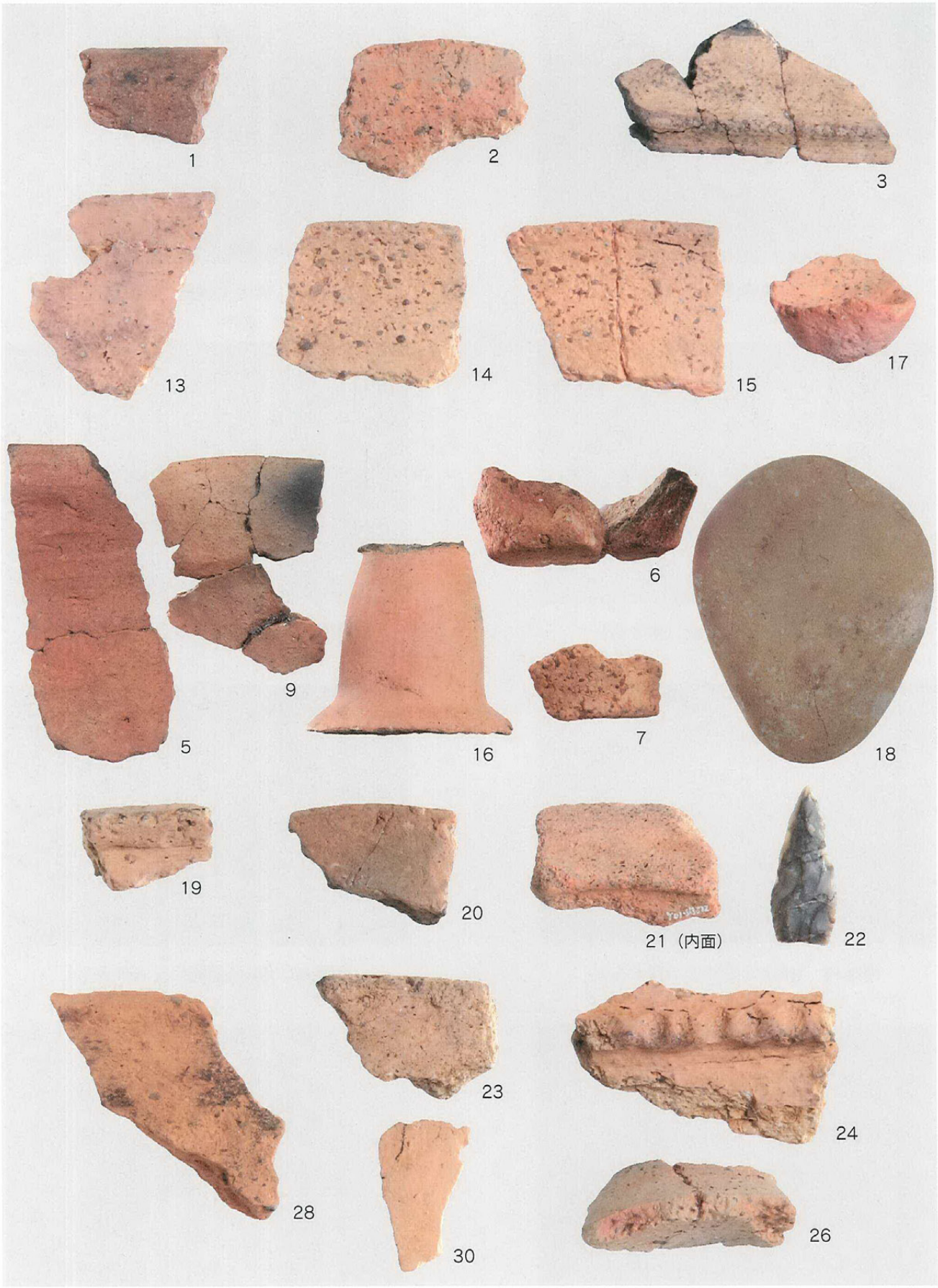
図版62　SA-6完掘状況（南から）



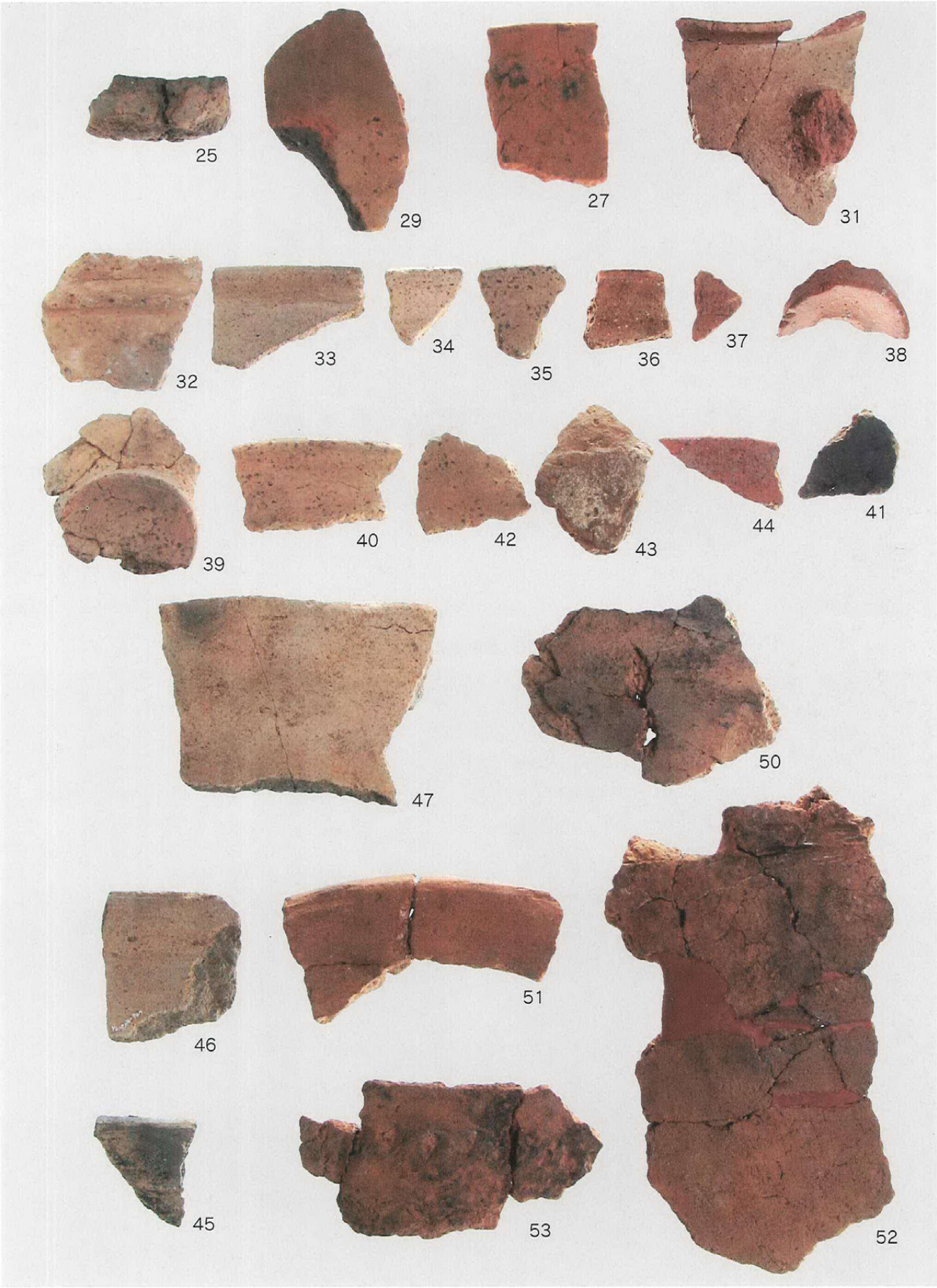
図版63　SC-10遺物出土状況（南から）



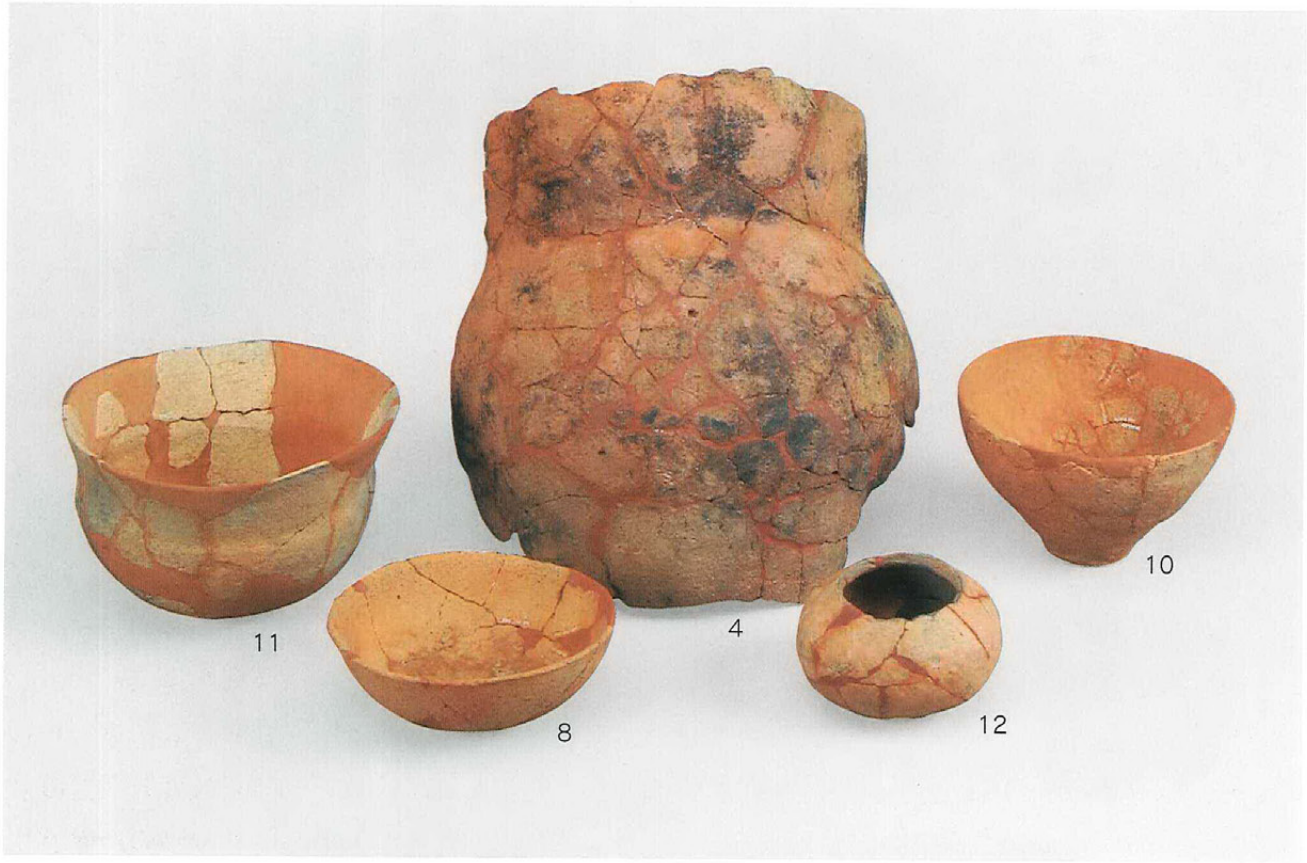
図版64　SC-10完掘状況（南から）



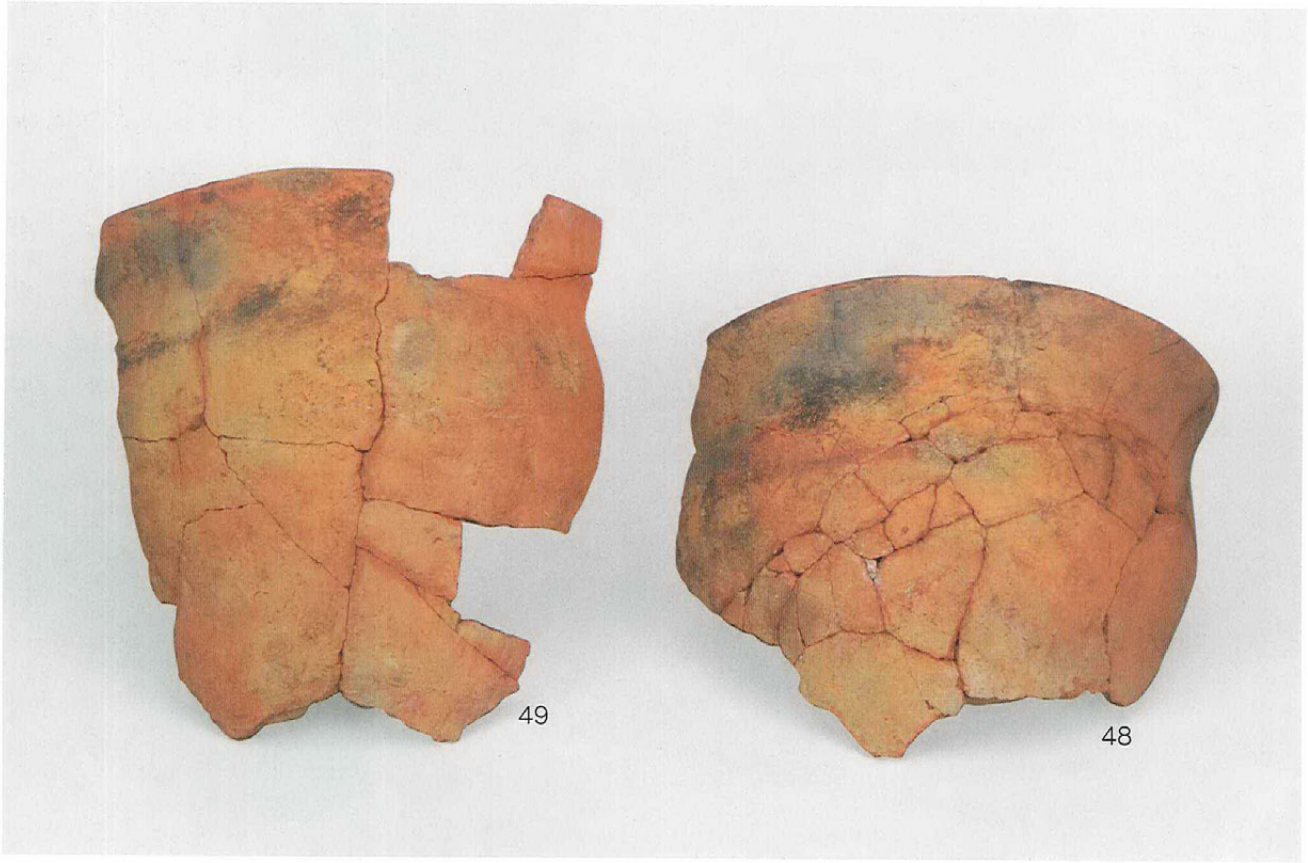
図版65　SA-1・SA-2・SA-3・SA-5出土遺物



図版66　SA-5・SA-6・SA-10出土遺物



図版67　SA-2出土遺物



図版68　SC-10出土遺物

第5章　まとめ

縄文時代早期の石鏃について

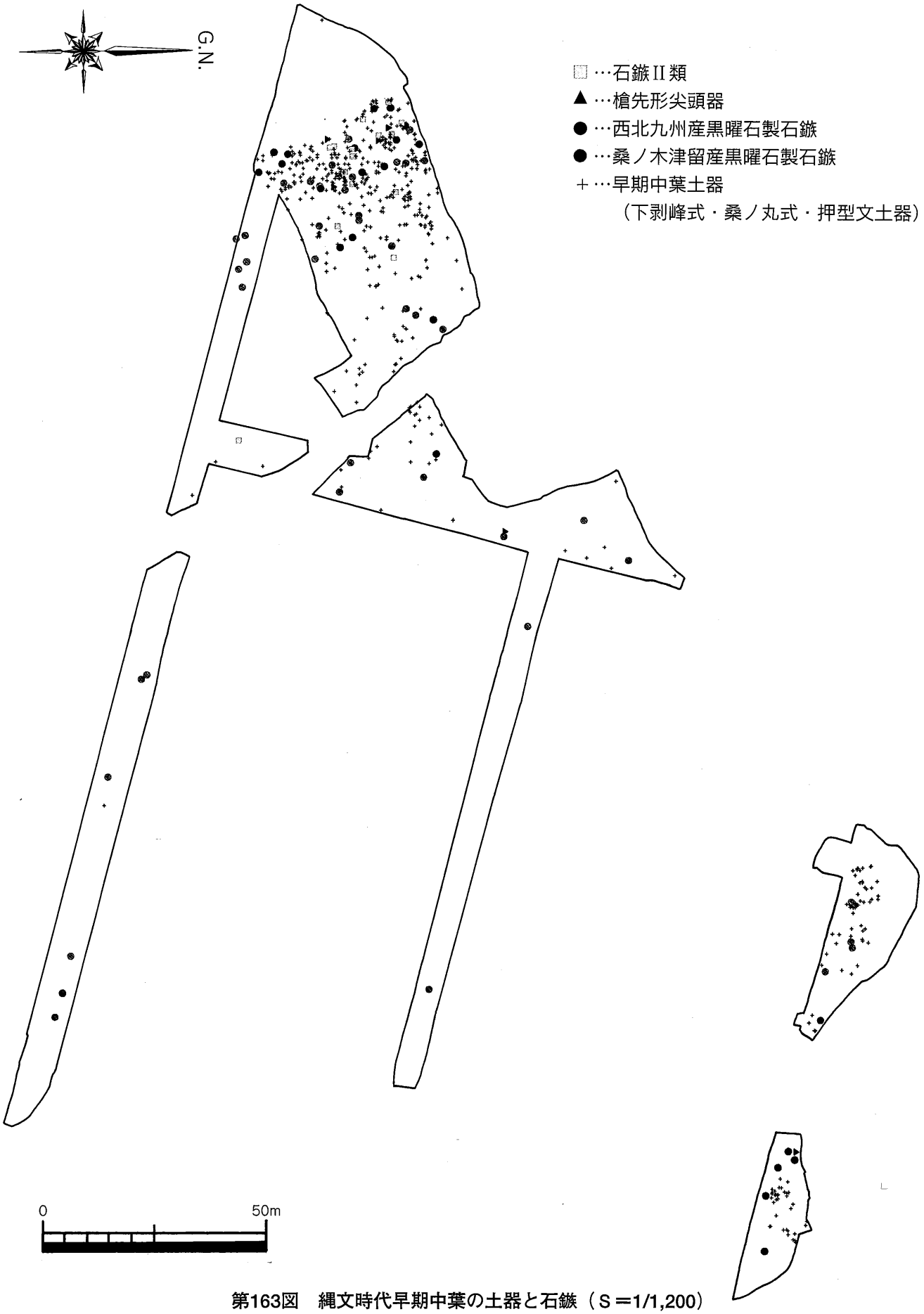
船引地区遺跡群の縄文早期の調査においては早期前葉～後葉までの土器が同一層から混在して出土するという状況がよく見られる。そのため遺構や土器以外の遺物についての時期の特定が困難になっている。本遺跡の整理作業に当たり土器の平面分布を検討した結果、遺物が多く出土したA・B区では早期中葉～後葉の土器が混在する状況であった。しかし、C・D・G・H区においては早期中葉の土器が集中する区域と早期後葉の土器が集中する区域がある程度分離するということが判明した。このような土器の平面分布に石鏃の平面分布を重ね合わせ、本遺跡における縄文早期の石鏃の形態や使用石材の傾向について検討を試みる。単純に土器と石器の平面分布を重ね合わせて時期を特定することの問題はあると思われるが、本遺跡での成果を今後の船引地区遺跡群の整理作業に活かせればと考えている。

なお本遺跡においては早期前葉の土器の出土量が早期中・後葉の土器の出土量と比べると極端に少なく、また平面分布も早期中・後葉の土器の平面分布と重なるという状況である。そのため早期前葉の土器の分布から石鏃の様相を把握することが困難であり、今回は早期前葉の土器の平面分布を使用して石鏃の検討を行うことはしなかった。一応土器の出土量から本遺跡の早期前葉の頃は主体となる時期ではなかったと考えておきたい。

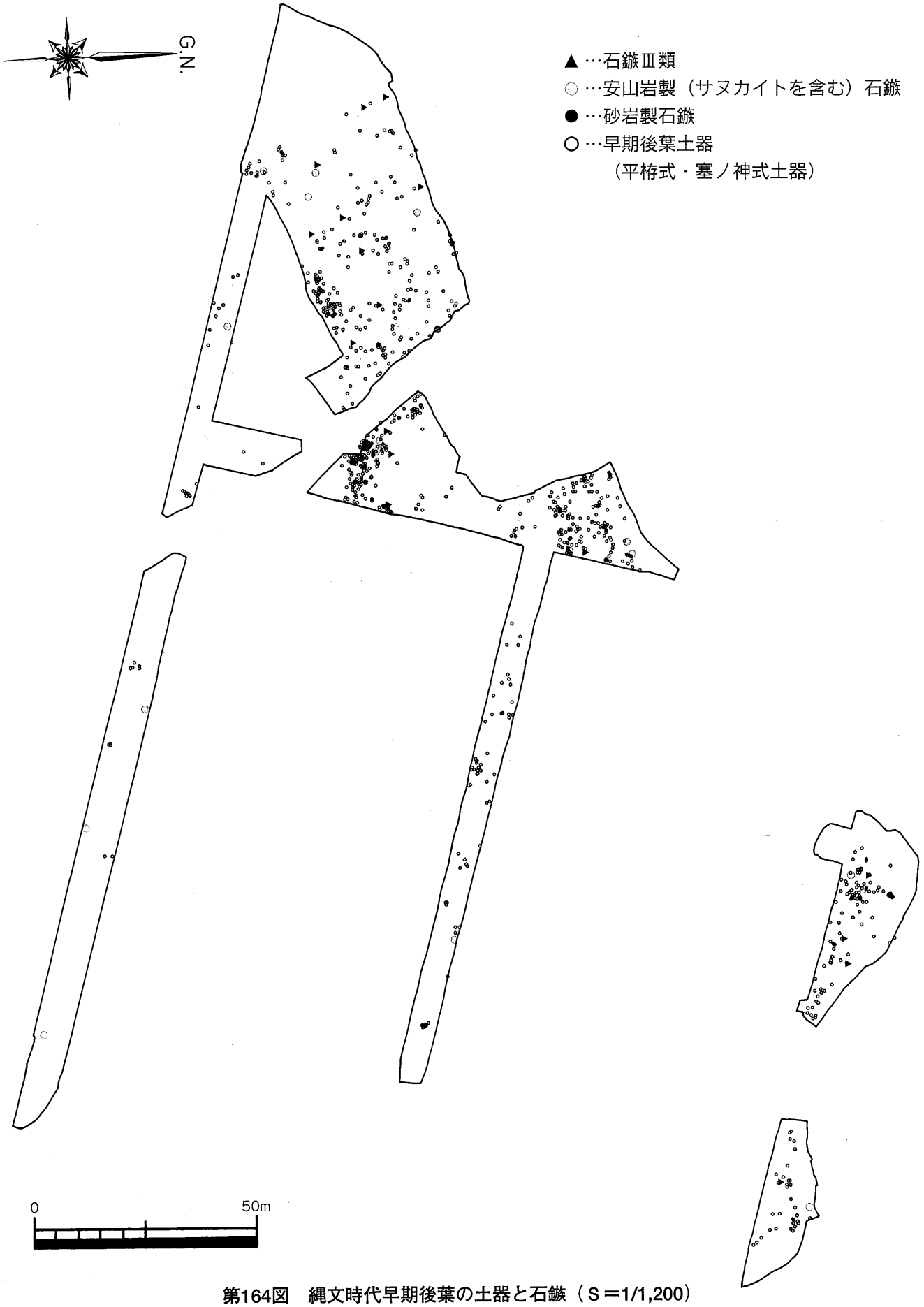
それでは早期の中・後葉の資料について検討を行う。早期中葉の土器（下剥峰式・桑ノ丸式・押型文土器）はG区の西側に分布を集中させている。早期中葉の土器と分布の重なる石鏃に注目すると、II類や西北九州産や桑ノ木津留産の黒曜石を使用するものが見られ、槍先形尖頭器も確認されている（第163図）。また早期後葉の土器（平栫式・塞ノ神式）は、G区の東側やC・D・H区に集中している。早期後葉の土器と重なる石鏃に注目すると、III類や安山岩（サヌカイトを含む）を使用するものが見られる。また出土点数が多くない為はっきりとした傾向は見られないが、砂岩製のものも分布が重なるようである（第164図）。

このような結果をまとめると、使用石材については早期中葉の時期において桑ノ木津留産・西北九州産の黒曜石の使用が特徴的であり、後葉になると安山岩や砂岩の使用が特徴的になる可能性がある。また形態については早期中葉にはII類が特徴的であり、槍先形尖頭器も見られる。そして後葉になるとIII類が特徴的になるという傾向が想定されるだろう。一応縄文早期における土器と石鏃の平面分布を重ね合わせ石鏃の形態や使用石材の傾向をいくつか考察することができた。しかし早期前葉の資料が混在している可能性を無視している点、早期中・後葉の土器の平面分布は完全に離れていないという点、使用石材の分析は肉眼観察によるという点、本遺跡では姫島産黒曜石製の石鏃が土器の分布から離れる傾向があり、土器との検討ができなかった点などの問題点も多く、課題を数多く残すこととなった。

これらの課題も今後の船引地区遺跡群の整理を進めていく上で少しずつ解決していきたい。



第163図　縄文時代早期中葉の土器と石鏃（S＝1/1,200）



第164図　縄文時代早期後葉の土器と石鏃（S＝1/1,200）

当台地上における縄文時代早期の集石遺構使用時期について

今回は、隣接する坂元遺跡(『清武町埋蔵文化財調査報告書第15集　坂元遺跡』参照)とともに、当台地上における縄文時代早期の集石遺構の使用時期について考えていきたい。

当台地上で掘り込みを持つ集石遺構が営まれはじめるのは、自然科学分析等の裏付けはないものの層位的な判断で草創期であると推測される(坂元遺跡Ｅ区SI-72)。この層位で検出されている集石遺構は当台地上で数基だが、いずれもかなり小規模で、蒸し焼き料理を行った施設としてはやや考えにくいものばかりである。

縄文時代早期になると、まず9700年BP頃に使用された可能性の高い集石遺構が両遺跡で10基程確認されている。この時期の集石遺構は、草創期の集石遺構と比較すると極めて大型な掘り込みを持ち、複数回の使用を想像させるかなり破砕した焼礫が掘り込みの中央部に集中している。又、埋土も炭化粒を多量に含んだやや粘性のあるもので、これらの特徴からみて蒸し焼き料理を行った施設と考えてまず間違いないであろう。

その後、9700年BP頃から8700年BP頃にかけて使用された可能性の高い集石遺構が当遺跡及び坂元遺跡E区で多数検出されているが、掘り込みは持つものの底石は配置していないタイプがほとんどである。底石を配置しているタイプの集石遺構が使用されはじめるのは8700年BP頃からで、そのピークは8300年BP～8200年BPであるが、このピーク時の集石遺構はいずれもかなり大型のものである。

各遺跡の出土土器とあわせて考えると、貝殻円筒形土器の前半に位置する土器が主流の調査区では掘り込みは持つものの底石は配置していないタイプがほとんどで、押型文土器が主流の調査区ではかなり大型で底石を配置しているタイプの集石遺構が多く検出されているという傾向がみられた。

第16表　集石遺構使用時期予想図（坂元遺跡・山田第１遺跡）

	9700年BP　9500年BP　9000年BP　8500年BP　8000年BP
坂元遺跡　B区	13基中５基が底石を配置している 8基　5基
出土土器の特色	最も多数出土しているのは押型文土器で、貝殻円筒形土器では下剥峯式・桑ノ丸式土器が多く出土している。平栫式土器はほとんど見当たらず、塞ノ神式土器は押型文土器ほどではないが出土している。
坂元遺跡　E区	43基中４基が底石を配置している
出土土器の特色	岩元式・前平式・知覧式・下剥峯式・桑ノ丸式など貝殻円筒形土器が主な出土土器である。押型文土器・塞ノ神式土器についても貝殻円筒形土器ほどではないが出土している。
山田第１遺跡	71基中７基が底石を配置している 2基　5基
出土土器の特色	貝殻円筒形土器、押型文土器いずれも出土しているが、押型文土器の方が多く出土している。平栫式土器はごくわずかな出土だが、塞ノ神式土器については極めて多量に出土している(特に撚糸文系)。
自然科学分析結果	知覧式土器 9290～9250年±40BP　桑ノ丸式土器 8400年±40年BP

＊[　　]は、自然科学分析の結果から推測した9700年BP～8000年BPにおける各遺跡の集石遺構使用時期幅である。
[- - - -]については、全ての集石遺構を分析したわけではないので、時間幅が広がる可能性があるという意味である。
又、[■■■]は、底石を配置している集石遺構(分析結果が得られた分に限る)の使用時期の時間幅を表している。

弥生・古墳時代の遺構群について

弥生～古墳時代に該当する遺構として、竪穴式住居５軒、土坑1基が検出された。使用の同時性を保証する遺構内の床面出土の遺物は少なく、決して良好な状況とはいえない。しかし、本遺跡の所在する船引台地上では、当時期の遺構の検出例が少ないため、本遺跡の資料が船引台地上の弥生・古墳時代の様相を明らかにするうえで、重要な資料となりうるだろう。そこで、検出された遺構の時期について、出土した土器をもとに検討していきたい。

まず住居の時期であるが、SA-1・SA-3の時期は、出土した遺物が少なく、破片も小さいため、時期の認定が難しい。SA-2からは、口縁部が長くのび、立ち上がるタイプの甕（4）や小形丸底壷が出土している。このことから、SA-2の時期は古墳時代前期頃と考えられる。SA-5からは、中溝式と思われる刻目突帯を巡らす甕の胴部片（24）や脚台状を呈する甕の底部片（25）が出土している。このことからSA-5 の時期は、弥生時代中期後半～後期前半頃と考えられる。SA-6からは、逆「L」字状を呈する甕の口縁部（33・34）や山ノ口式土器の甕の口縁部（36）が出土している。このことからSA-6の時期は、弥生中期後半頃と思われる。

次に土坑の時期について検討したい。SC-10からは弥生時代終末期～古墳時代前期頃にみられる口縁部がやや長く、外反するタイプの甕（48・49）が出土している。一方で、弥生時代後期前葉～後葉頃にみられる頸部に刻目をもつタイプの甕（52・53）も出土している。土器の残存状況や接合状況から、SC-10の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期頃と考えられる。この時期の土坑から頸部に刻目をもつタイプの甕が出土した理由として、流れ込みの遺物であること、もしくは弥生時代終末期～古墳時代前期頃まで残ることが可能性として挙げられる。しかし、口縁部が残存していないため、判断することが難しい。

このように、遺構内から出土した土器の検討から、山田第１遺跡における遺構の時期は、弥生時代中期後半～後期前半頃（SA-5・SA-6）と弥生時代終末期～古墳時代前期頃（SA-2・SC-10）の大きく二時期にわけることができる。近隣の遺跡をみてみると、宮崎市椎屋形第１遺跡、宮崎市田野町ズクノ山第１遺跡、清武町須田木遺跡で弥生時代中期～後期の住居が検出されている。こうした近隣の遺跡と比較・検討し、船引台地上における弥生・古墳時代の様相を解明していくことが今後の課題である。

把手付甕（第158図31）について

SA-5から出土した把手付甕（第158図31）の類例を宮崎県下で探したが、現状では確認することができなかった。視野を広げてみてみると、徳島県矢野遺跡などで類似した形態をもつ甕を確認することができた。阿波地域では、弥生時代中期後葉頃に、甕や鉢に把手の付いた形式が目立つようである（註１）。把手付甕の時期は、SA-5から出土した他の遺物の時期と矛盾はない。しかし、SA-5から出土した把手付甕と阿波地域の把手付甕を比較すると、口唇部形態に違いがみられる。また、在地の土器と同様の胎土で製作されていることをあわせて考えると搬入品とは言いがたいが、阿波地域の影響をうけた土器の可能性は高いだろう。

註１　近藤　玲　2004　「阿波の弥生中期中葉～後期初頭の土器」『弥生中期の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会　埋蔵文化財研究会

清武町、山田第１遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．山田第１遺跡における放射性炭素年代測定

１．試料と方法

試料名	地点	遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	YD 1	SI-7	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.2	YD 1	SI-8	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.3	YD 1	SI-15	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.4	YD 1	SI-18	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.5	YD 1	SI-28	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.6	YD 1	SI-39	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.7	YD 1	SI-45	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.8	YD 1	SI-47	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.9	YD 1	SI-54	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.10	YD 1	SI-57	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.11	YD 1	SI-61	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.12	YD 1	SI-62	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.13	YD 1	SI-65	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.14	YD 1	SI-67	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.15	YD 1	SI-68	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.16	YD 1	SI-71	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.17	YD 1	SI-73	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.18	YD 1	SC－12	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.19	YD 1	SC－13	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.20	YD 1	SC－14	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
No.21	YD 1	SA－2	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

2．測定結果

試料名	測定No. (Beta－)	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代（西暦） （1σ:68%確率，2σ:95%確率）
No.1	202894	8760±50	−27.2	8720±50	交点：cal BC 7740 1σ：cal BC 7800-7620 2σ：cal BC 7950-7600
No.2	202895	8730±40	−26.6	8700±40	交点：cal BC 7720 1σ：cal BC 7760-7610 2σ：cal BC 7810-7600
No.3	202896	8760±50	−27.1	8730±50	交点：cal BC 7750 1σ：cal BC 7810-7630 2σ：cal BC 7960-7600
No.4	202897	8770±40	−27.2	8730±40	交点：cal BC 7750 1σ：cal BC 7800-7650 2σ：cal BC 7940-7610
No.5	202898	8800±50	−26.6	8770±50	交点：cal BC 7800 1σ：cal BC 7950-7740 2σ：cal BC 8160-8130, 7980-7620
No.6	157097	8300±40	−28.0	8250±40	交点：cal BC 7310 1σ：cal BC 7340-7190 2σ：cal BC 7450-7390, 7370-7140
No.7	157098	8350±40	−28.3	8300±40	交点：cal BC 7340 1σ：cal BC 7460-7320 2σ：cal BC 7490-7280,7230-7190
No.8	157099	8300±40	−25.8	8290±40	交点：cal BC 7340 1σ：cal BC 7450-7390, 7370-7310 2σ：cal BC 7480-7190
No.9	157100	8440±40	−26.4	8420±40	交点：cal BC 7520 1σ：cal BC 7540-7490 2σ：cal BC 7560-7460
No.10	157101	8360±40	−26.2	8340±40	交点：cal BC 7460 1σ：cal BC 7490-7340 2σ：cal BC 7520-7320
No.11	157102	8410±50	−27.8	8360±50	交点：cal BC 7470 1σ：cal BC 7510-7430, 7420-7350 2σ：cal BC 7540-7320
No.12	157103	8390±40	−25.5	8380±40	交点：cal BC 7490 1σ：cal BC 7520-7460 2σ：cal BC 7540-7340

試料名	測定No. (Beta－)	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代（西暦） （1σ:68%確率，2σ:95%確率）
No.13	157104	9530±40	−25.6	9520±40	交点：cal BC 8790 1σ：cal BC 9100-9010,8820-8760 2σ：cal BC 9130-8980,8920-8730
No.14	157105	8660±40	−27.1	8630±40	交点：cal BC 7600 1σ：cal BC 7620-7590 2σ：cal BC 7730-7580
No.15	157106	8370±40	−28.1	8320±40	交点：cal BC 7450,7400,7360 1σ：cal BC 7470-7330 2σ：cal BC 7500-7300
No.16	157107	9540±50	−26.3	9520±50	交点：cal BC 8790 1σ：cal BC 9110-9000,8830-8750 2σ：cal BC 9140-8970,8940-8710
No.17	157108	9600±40	−26.1	9580±40	交点：cal BC 9120,9000,8890,8880,8840 1σ：cal BC 8480-8300 2σ：cal BC 8570-8280
No.18	202899	7850±40	−26.2	7830±40	交点：cal BC 6650 1σ：cal BC 6680-6630 2σ：cal BC 6710-6580
No.19	157109	9690±40	−26.7	9660±40	交点：cal BC 9180 1σ：cal BC 9210-9140,8970-8940 2σ：cal BC 9230-9120,9000-8890,8880-8840
No.20	157110	8290±40	−26.2	8270±40	交点：cal BC 7320 1σ：cal BC 7430-7420, 7350-7290 2σ：cal BC 7470-7170
No.21	202902	1770±40	−27.9	1720±40	交点：cal AD 340 1σ：cal AD 250-390 2σ：cal AD 230-410

（1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

（2）デルタδ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

（3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C値を－25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

（4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU－Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１シグマσ(68%確率）と２σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・２σ値が表記される場合もある。

文　献

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041－1083.

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1－36.

II．山田第１遺跡における樹種同定

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試料

試料は、縄文時代早期の集石遺構などから採取された炭化材15点である。

3．方法

試料を割折して炭化材の新鮮な横断面（木口と同義)、放射断面（柾目)、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。炭化種子については、肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴及び現生標本との対比によって同定を行った。

4．結果

表１に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

ツブラジイ　Castanopsis cuspidata Schottky　ブナ科　図版１

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は単列のものと集合放射組織が存在する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　図版２

横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～２列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節には、カシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　図版３

横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～２列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節には、クヌギ、アベマキがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

ブナ科　Fagaceae

横断面：部分的ではあるが大型の道管と火炎状に配列する小道管が見られる。放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科のクリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかであるが、試料が小片で保存状態が悪いことから、ブナ科の同定にとどめた。

散孔材　diffuse－porous wood

横断面：小型の道管が散在する。放射断面：道管と放射組織が存在する。接線断面：道管と多列幅の放射組織が存在する。

以上の形質より散孔材に同定される。散孔材には広葉樹の多くの樹種が含まれるが、本試料は小片で保存状態が悪いことから、散孔材の同定にとどめた。

樹皮　bark

師部柔細胞、師部放射柔細胞が見られる。以上の形質より樹皮と考えられるが、樹種の同定には至らなかった。

(炭化種子)

不明　unknown

炭化による変形が著しく、同定には至らなかった。

5．所見

分析の結果、コナラ属コナラ節６点、ブナ科（クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれか）６点、コナラ属クヌギ節１点、ツブラジイ１点、散孔材１点、樹皮１点が同定された。

このうち、コナラ属コナラ節とコナラ属クヌギ節は、日当たりの良い山野に生育する落葉高木で、温帯ないし冷温帯を中心に分布し、二次林要素も含まれる。放射性炭素年代測定（第Ｉ章）では、おおむね9,000年BP前後の年代値が得られている。なお、コナラ節やクヌギ節の種実（ドングリ）は、水さらしや加熱処理などのアク抜きをしないと食用にならない。

ツブラジイは、温帯下部の暖温帯に分布する常緑高木で、西南日本に分布する照葉樹林の主要構成要素である。放射性炭素年代測定では、1,720±40年BPの年代値が得られている。ツブラジイの種実（ドングリ）は、アク抜きの必要がなく、そのままでも食用となる。

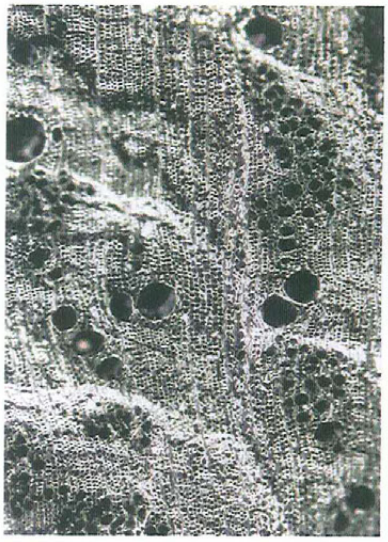
文　献

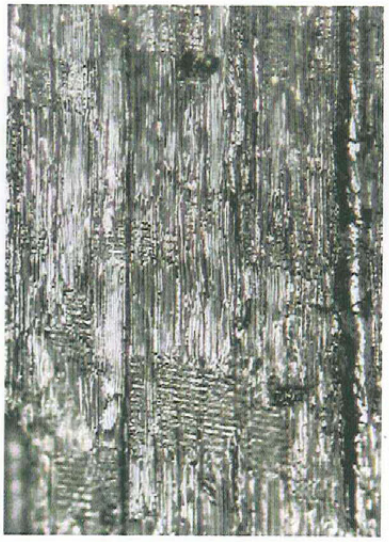
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20－48.

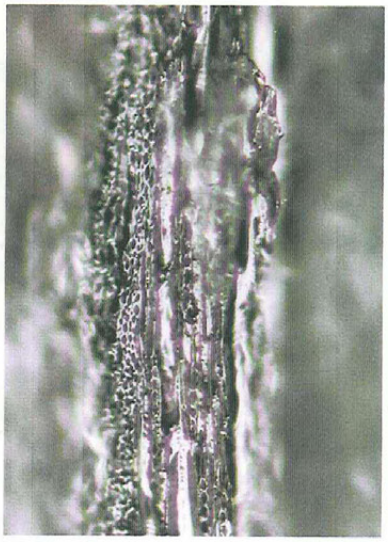
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49－100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

山田第1遺跡の炭化材

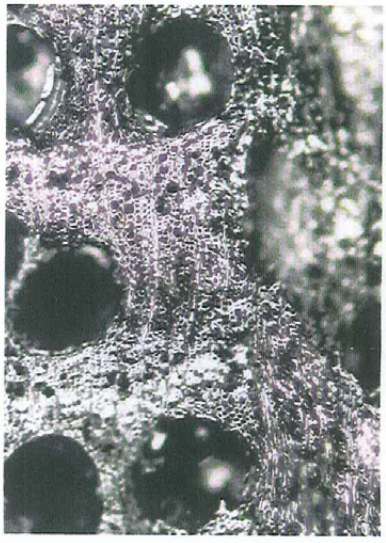


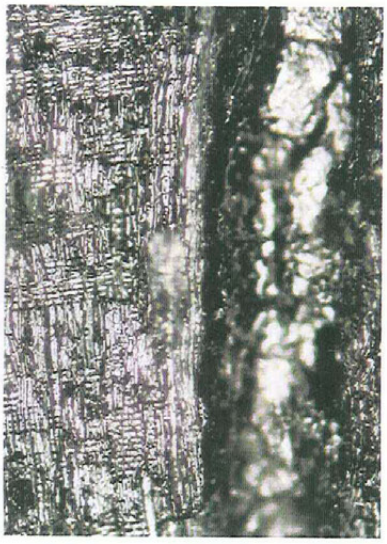


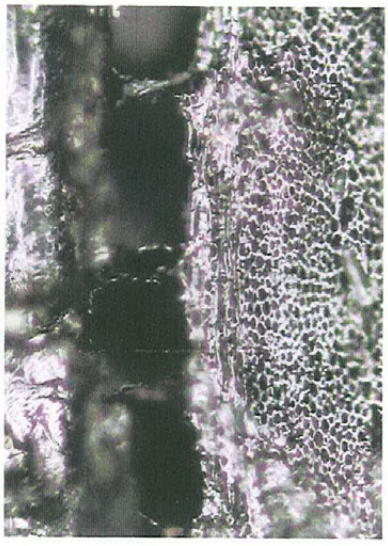


横断面 ：0.4㎜　放射断面 ：0.4㎜　接線断面 ：0.2㎜

1. YD1 SA-2　ツブラジイ







横断面 ：0.4㎜　放射断面 ：0.4㎜　接線断面 ：0.2㎜

2. YD1 SI-8　コナラ属コナラ節

調　査　抄　録

フリガナ	ヤマダ　ダイイチ				
書名	山田第１遺跡				
副書名	県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書				
巻次	第１集				
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第18集				
編集者名	井田　篤・秋成雅博・今村結記				
発行機関	清武町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地				
発行年月日	2006年３月				
所在遺跡名	所在地	市町村：遺跡番号	北緯	東経	調査期間
山田第１遺跡	清武町大字船引字山田	清武町：208（1）	31°52′23″ （日本測地形）	131°22′18″ （日本測地形）	99.4.28～ 00.3.30 00.07.10～ 00.08.04
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
7,700㎡	農業関連	集落	旧石器 縄文（早期） 弥生・古墳	集石遺構 陥し穴 炉穴 竪穴式住居 など	石器 縄文式土器 弥生式土器 など
特記事項					

清武町埋蔵文化財調査報告書　第18集

山田第1遺跡

県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書

発行年月日　平成18年2月28日
編集発行　清武町教育委員会
〒889-1696 宮崎県宮崎郡清武町大字船引204
TEL　0985-85-1111
印　　刷　株式会社 宮崎南印刷
〒880-0911 宮崎県宮崎市大字田吉350-1
TEL　0985-51-2745　FAX　0985-52-2682